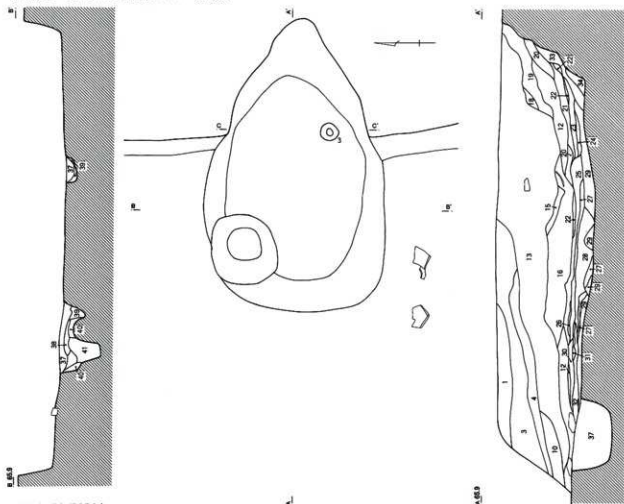
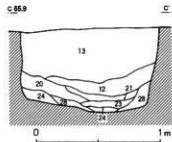
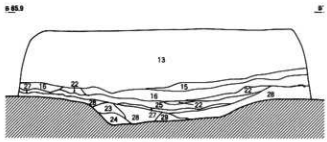


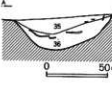
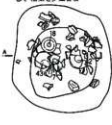
第330図 第197号住居跡カマド・貯蔵穴



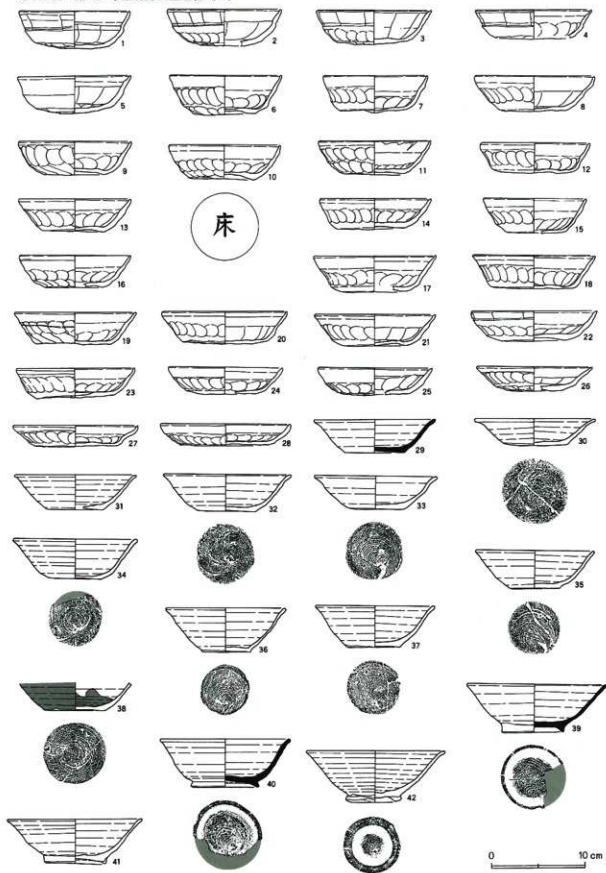
- 5 暗褐色土 炭化物を少量含む。礫、目録石を多量に含む。黄褐色土をブロック状に含む 砂質
- 6 暗褐色土 炭土、炭、目録石を少量含む。礫を多量含む
- 7 暗褐色土 炭土、砂礫少量含む。炭化物微量含む 砂質
- 8 灰褐色土 ふみめられた面(砂質土(貼り床))
- 9 灰褐色土 炭土、炭化物を微量含む。灰色砂質土を多量に含む
- 10 暗灰褐色土 炭土、炭化物、砂、粘土を少量含む



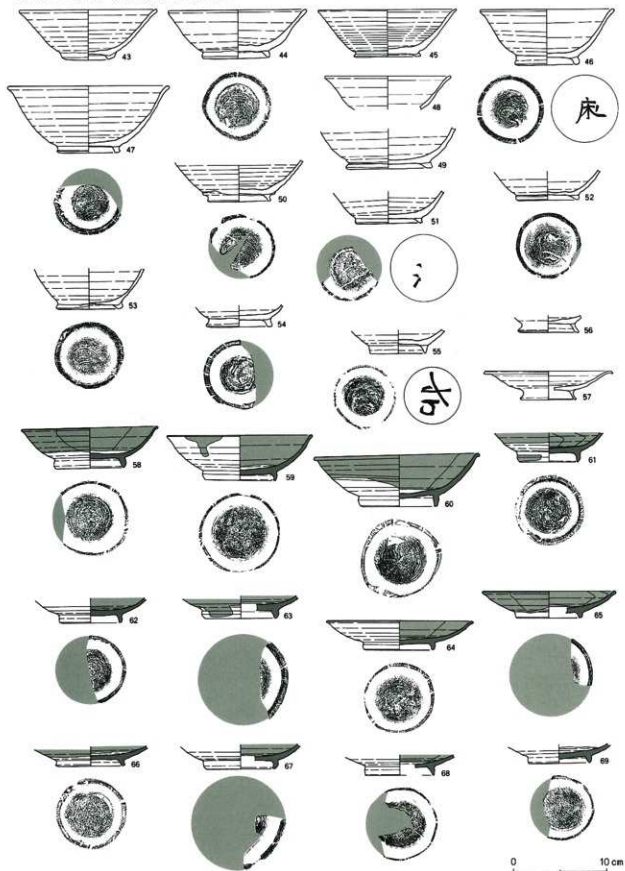
- 11 暗褐色土 炭土を多量に含む。礫を少量含む
- 12 暗褐色土 炭土、粘土ブロック、炭化物を多量に含む
- 13 暗灰褐色土 炭土、粘土ブロックを多量に含む 粘性あり (局部礫質土)
- 14 褐色土 炭土、粘土ブロックを多量に含む。炭化物、礫、目録石を少量含む 砂質
- 15 暗褐色土 炭土を多量含む。炭化物を少量含む 粘性あり
- 16 褐色土 炭土、粘土ブロックを多量に含む。炭化物、黄褐色粘土を少量含む 粘性あり
- 17 黒色土 炭主体 粘土を少量含む
- 18 赤褐色土 炭土主体
- 19 暗褐色土 炭を少量含む
- 20 暗黄褐色土 炭土をブロック状に多量に含む。灰、炭を少量含む
- 21 黒色土 炭化物、炭主体 炭土を少量含む
- 22 褐色土 礫主体 炭土を微量含む。目録石を少量含む。灰を多量に含む 粘性あり
- 23 灰黄褐色土 黄褐色粘土主体 炭土を少量含む 粘性あり
- 24 灰黄褐色土 黄褐色粘土、砂主体 炭土、炭、炭を多量に含む
- 25 褐色土 炭土主体 炭、炭を多量に含む
- 26 褐色土 炭土主体 炭、黄褐色粘土を少量含む
- 27 黒色土 炭化物層
- 28 灰黄褐色土 炭土、砂礫を多量に含む。炭を少量含む
- 29 灰黄褐色土 炭土を多量に含む。礫を少量含む
- 30 灰黄褐色土 黄褐色粘土主体 部分的に炭のうすい層を含む
- 31 褐色土 炭土主体 炭化物、炭を多量に含む
- 32 灰褐色土 黄褐色粘土主体 炭土、炭化物を少量含む。灰を多量に含む 粘性あり
- 33 暗褐色土 炭土を多量に含む。炭化物、砂を少量含む
- 34 暗褐色土 炭土を少量含む。砂礫を多量に含む
- 35 暗褐色土 炭土を多量に含む。炭を少量含む 粘性あり
- 36 暗褐色土 炭土を多量に含む。炭を部分的に含む 粘性あり
- 37 暗褐色土 炭土、炭を多量に含む。砂礫を少量含む 粘性あり(張り床)
- 38 暗褐色土 炭土、炭、砂を多量に含む
- 39 暗灰褐色土 炭土、炭を少量含む。砂礫を多量に含む
- 40 暗灰褐色土 炭土を少量含む (砂礫層)
- 41 暗灰褐色土 砂主体 炭土、暗褐色土を少量含む



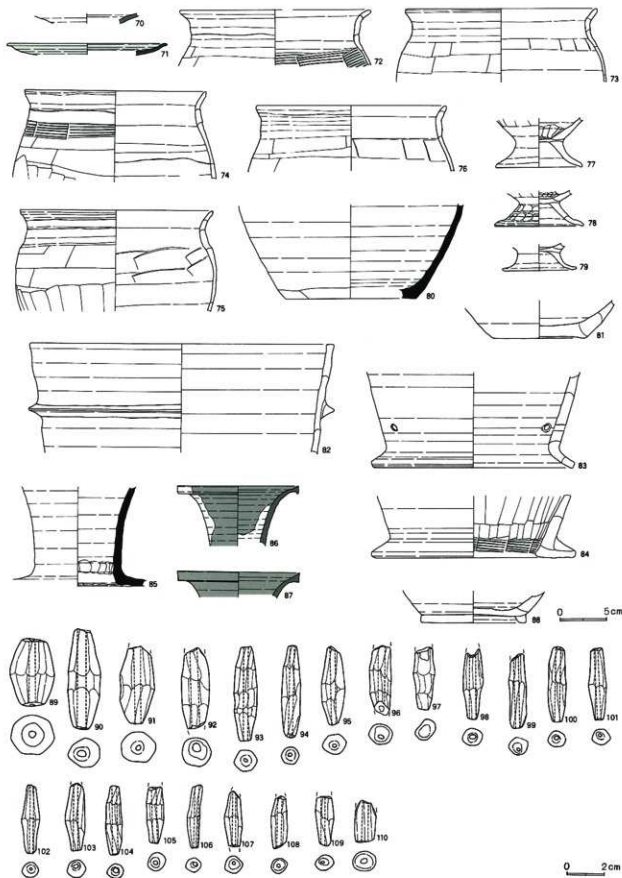
第331图 第197号住居跡出土遺物(1)



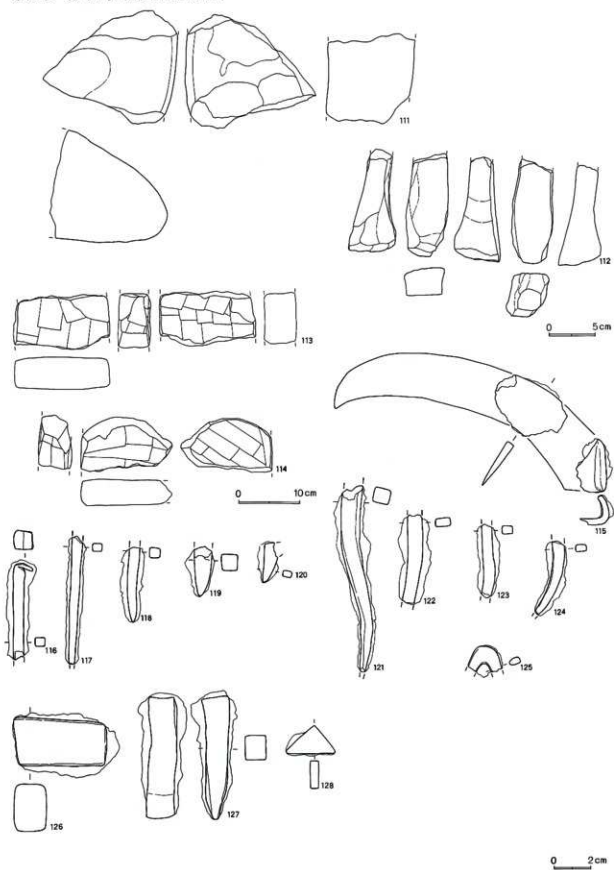
第332图 第197号住居跡出土遺物(2)



第333图 第197号住居跡出土遺物(3)



第334图 第197号住居跡出土遺物(4)



第287表 第197号住居跡出土遺物観察表(2)

番号	器種	種別	口径	器高	胴	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
53	高台付碗	NS				6.4	B, E, G	良好	R	灰白	40	
54	高台付碗	NS				6.2	B	良好	R	灰白	20	
55	高台付碗	NS				5.8	B, D	良好	R	黄灰	20	
56	高台付碗	NS				6.2	B	良好	R	灰白	20	貼床内
57	高台付皿	HS	13.1	3.0		5.8	B, E	良好	R	浅黄橙	20	貼床内
58	高台付碗	K	14.3	4.3		7.1	B	良好	R	オリーブ灰		底-100, 他-50, P2, 貼床内
59	高台付碗	K	15.3	4.8		7.4	D	良好	L	灰白		底-100, 他-50, P5
60	高台付碗	K	17.3	5.4		7.5	B, D	良好	R	オリーブ灰		底-100, 他-25
61	高台付碗	K				6.1	B, D	良好	L	灰白	100	
62	高台付碗	K				6.0	R, D	良好		灰白	50	
63	高台付碗	K				7.4	B, D	良好	R	オリーブ灰	25	
64	高台付皿	K	15.3	3.1		7.1	B, D	良好	R	灰白		底-100, 他-15
65	高台付皿	K	13.8	2.8		6.5	D	良好	R	オリーブ灰	20	
66	高台付皿	K				6.7	D	良好	R	灰白	100	貼床内
67	高台付皿	K				7.2	B	良好	R	灰白	20	
68	高台付皿	K				7.1	D	良好	R	灰白	80	
69	高台付皿	K				6.8	D	良好	R	灰白	60	
70	段皿	K					D	良好		外-灰白。 内-オリーブ灰	5	
71	折縁皿	M					B	普通		淡緑	5	
72	堇BⅢc	H	20.0				B, E, H	良好		外-灰黄褐。 内-黄橙	30	
73	堇BⅢa	H	20.0				B, C, E	良好		浅黄橙	20	カマド
74	堇BⅢa	H	19.0				B, C, E, H	良好		浅黄橙	15	
75	堇AⅢb	H	20.1				B, E, I	良好		橙	50	カマド
76	堇BⅢa	H	19.8				B, E, H	良好		黄橙	20	
77	台付堇	H				9.0	B, E, I	良好		浅黄橙	60	
78	台付堇	H				9.2	A, B, E	普通		浅黄橙	30	
79	台付堇	H				6.9	B, C, E	良好		内-橙。 外-薄灰	90	P6
80	壺	S				13.7	B	良好		青灰	15	貼床内
81	壺	NS				9.1	B, C, H	良好	R	灰白	100	
82	瓶BⅡ	NS	31.7		7.0		B, C	良好		灰白	10	
83	瓶	NS				20.9	B, E	良好		灰白	15	
84	瓶	NS				20.6	B, E, G	良好		灰白	30	
85	長頸壺	S					B, G	良好	R	青灰	70	
86	長頸壺	K	12.7				D	良好	L	オリーブ灰	25	
87	長頸壺	K	12.9				D	良好		外-灰白。 内-オリーブ灰	5	
88	壺	NS				10.9	B, G	良好		浅黄橙	80	

主軸方位は、N-90°-Eであった。

カマドは、東壁の南東寄りに検出した。煙道部から焚き口部までの長さは、2.32mと非常に大形のカマドであった。

袖は、検出できなかった。しかし燃焼部の位置から袖は、造り付けで住居跡内に長く延びていたと推定した。カマド内からは、遺物もほとんど出土しなかった。

焚き口部から燃焼部にかけては、楕円形に掘り込まれていた。煙道部は、急な傾斜をもって階段状に立ち上がっていた。

貯蔵穴は、カマド右脇の南東隅に検出した。形状は、方形で規模は、長径0.85m・短径0.76m・深さ0.25mと、カマドや住居の規模に比べ小形であった。貯蔵穴の西側に接して、長さ1.0mの不整形の浅い掘り込み

を検出した。

遺構の切り合い関係は、第196号住居跡より新しかった。

遺物は、カマド内から土師器の坏(3)、貯蔵穴内およびその周辺から土師器の坏(5・7・10・16・18・19・20・23)・皿(27)、須恵器の高台付椀(42・43)、土師器の台付甕(77)が出土し、1号小穴内から土師器の台付甕(79)、5号小穴周辺から土師器の坏(15・25)、甕(81)が出土した。また住居跡の中央から鉄釘(116・117・124)、凝灰岩の切石(113)が出土した。

1から24までは、土師器の坏である。1・3・6から17・19・21・22・24は、坏AⅥである。ほかは、坏AⅣである。10の底部外面には、墨書「床」がみられる。25から28は、土師器の皿である。2・4・15・16・17・24・25・26は底部が欠損している。

29から38は、椀である。29は須恵器(S)、32と38は、須恵器(HS)である。その他は須恵器(NS)である。39から56は、高台付椀である。39・40は、須恵器(S)である。46は底部外面に墨書「床」がみられる。48・57は、須恵器(HS)である。他は、須恵器(N

S)である。51は墨書土器である。文字は詳読できない。55は底部外面に墨書「十万」がみられる。31・48は底部、38・49から53は口縁部が欠損している。54から56は底部のみである。38は黒色の付着物が底部内面と外面全面に確認できる。油煙の痕跡と考えられる。

58から63は、灰釉陶器の高台付椀である。64から69は、灰釉陶器の高台付皿である。70は、灰釉陶器の段皿である。71は、緑釉陶器の折縁皿である。62・63・66から69は口縁部、65・71は底部が欠損している。70は体部のみである。

72から79は、土師器の甕である。72から74・76は胴部中位以下、75は胴部下位以下が欠損している。77から79は脚部のみである。

80は、須恵器(S)の甕である。81は、須恵器(NS)の甕である。82から84は、土師器甕である。85は、須恵器(S)の長頸壺である。80は胴部下位のみ、81・83・84は底部のみ、85は頸部のみである。82は胴部中位以下が欠損している。

86・87は、灰釉陶器の長頸壺である。口縁部のみである。

第288表 第197号住居跡出土土器観察表

番号	色	調	残存率	長さ	径	穴径	重さ(g)	型式	欠損分類	写真番号	出土位置その他
89		橙	100	3.6	2.3	0.3	18.0	B 1	I a	62	
90		橙	100	5.3	1.7	0.5	12.3	C 1	I b	170	
91	浅	黄 橙	90		1.8	0.3	10.7	C 1	II a	171	
92	浅	黄 橙	80		1.6	0.5	7.7	C 1	III	172	
93		橙	100	5.0	1.3	0.3	6.1	C 2	I a	422	
94		橙	100	4.9	1.0	0.2	3.3	C 2	I a	423	
95	黄	橙	100	4.2	1.3	0.2	4.4	C 2	I b	424	
96	に	ぶ い 橙	60		1.3	0.3	3.9	C 2	III	425	
97	に	ぶ い 橙	60		1.1	0.8	3.9	C 2	III a	426	
98	浅	黄 橙	70		1.1	0.3	2.3	C 2	II b	427	
99		橙	80		1.0	0.2	3.1	C 2	I b	428	
100		橙	100	4.0	0.9	0.3	3.1	C 2	I a	429	
101		橙	100	3.8	1.0	0.2	2.3	C 2	I a	430	
102	浅	黄 橙	100	3.7	0.9	0.2	1.8	C 2	I a	431	
103	黄	橙	90		1.0	0.3	2.9	C 2	I b	432	
104		橙	100	3.7	0.9	0.3	1.9	C 2	I c	433	
105		橙	80		0.9	0.3	2.2	C 2	II a	434	
106	褐	灰	100	3.3	0.8	0.2	1.4	C 2	I a	435	
107	褐	灰	60		0.9	0.2	2.0	C 2	II a	436	
108	浅	黄 橙	90		0.8	0.2	1.5	C 2	II b	437	
109		橙	50		0.9	0.2	2.0	C 2	II b	438	
110	に	ぶ い 橙	50		1.2	0.3	2.3	C 2	III	439	

88は、須恵器（NS）の壺である。
底部のみである。

89から110は、土鍾である。

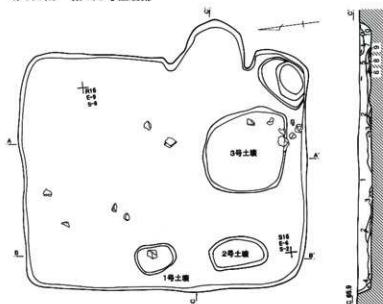
111・112は、砥石である。

113・114は、凝灰岩の切石である。

115から128は、鉄製品である。115は鎌（破片）、116・117・118・119・121は釘、120は鋸、122・123・124は棒状鉄製品、125は折れ曲がった棒状鉄製品、126は不明鉄製品、127は楔、128は三角形の板状鉄製品である。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第197号竪穴式住居跡の中堀V期に位置付けたい。

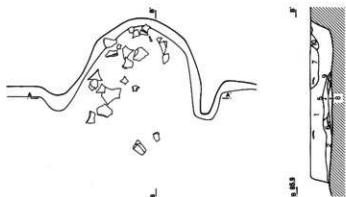
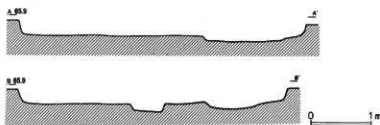
第335図 第198号住居跡



第198号住居跡(第335図・第336図)

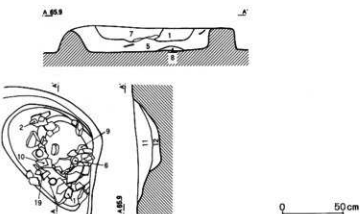
R・S-16グリッドで確認した。
周辺は、住居跡・土壇が比較的密集していた。

住居跡の形状は、長方形であった。
規模は、長さ4.60m・短辺3.76m・深さ0.23mであった。住居跡の床面には、土壇三基を検出した。1号土壇は、楕円形で長径0.65m・短径0.45m・深さ0.12m。2号土壇は、楕円形で長径0.91m・短径0.5m・深さ0.06m。3号土壇は、不整形形で長径0.85m・短

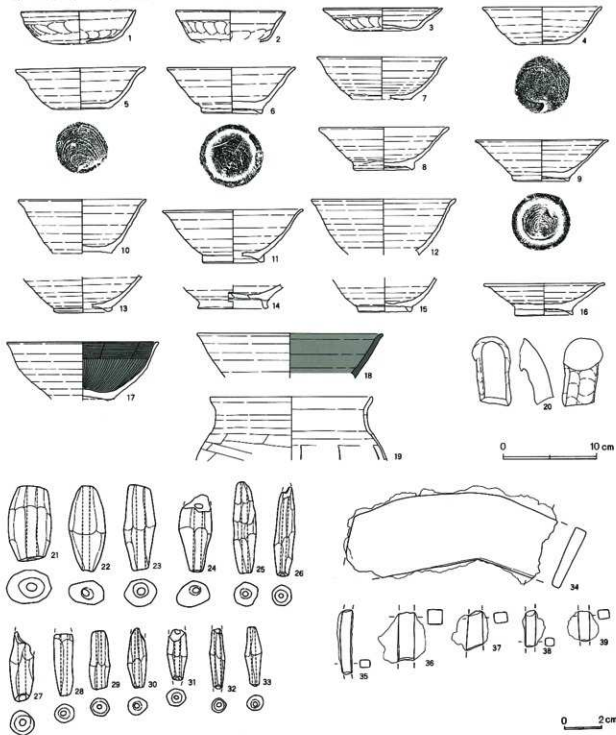


第198号住居跡

- 1 暗褐色土 粘土を多量に含み、砂粒を少量含む
- 2 暗褐色土 粘土粒を少量含み、暗灰褐色土ブロックをしもより状に含む
- 3 暗褐色土 暗灰褐色土ブロックをしもより状に多量に含む 粘土等は含まない
- 4 暗灰褐色土 砂粒を少量含む
- 5 暗褐色土 粘土、灰を多量に含み、暗灰褐色土をしもより状に含む 粘粒あり
- 6 暗褐色土 粘土ブロックを多量に含む（天井掘削層土）
- 7 暗灰褐色土 粘土少量含み、白色粘土を多量含む 砂質
- 8 灰褐色土 粘土を多量含む
- 9 暗褐色土 炭化粒を少量含む
- 10 暗褐色土 粘土を多量に含み、灰を少量含む
- 11 暗褐色土 粘土、炭化材を少量含む 灰褐色土を多量含む
- 12 暗灰褐色土 灰褐色土少量含む



第336図 第198号住居跡出土遺物



径0.8m・深さ0.13mであった。

主軸方位は、N-101°-Eであった。

カマドは、東壁の南東寄りに検出した。袖は、地山を掘り残して造られていた。非常に短く住居跡内に延びていた。燃烧部の掘り込みはみられなかった。

貯蔵穴は、カマドの右脇で検出した。形状は、不整楕円形であった。規模は、長径0.82m・短径0.62m・深さ0.19mであった。

遺構の切り合いは、みられなかった。

遺物は、貯蔵穴内から土師器の坏(2)、須恵器の

高台付椀（6・9・10）、土師器の甕（19）が出土した。

1は、土師器の坏AⅥである。2は、土師器の坏Aである。3は、土師器の皿である。1・2は底部が欠

損している。

4・5は、須恵器（HS）の椀である。6から15は、高台付椀である。7・9・10・13・15は、須恵器（NS）である。他は、須恵器（HS）である。7・11・

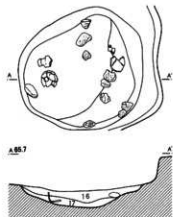
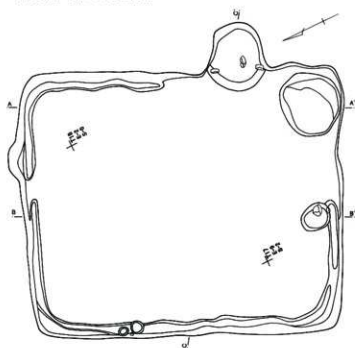
第289表 第198号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	罫	底径	胎土	焼成	備補	色調	残存	出土位置その他
1	坏	AⅥ	H	121	3.5	6.0	B, D, E	普通		黄 橙	60	貯蔵穴
2	坏	A	H	115			B, E	不良		淡 黄	20	貯蔵穴
3	皿	H		126	2.4	6.7	B, D, E	不良		橙 白	70	
4	椀	HS		126	4.0	5.7	B, I	良好	R	にぶい黄橙	90	
5	椀	HS		135	4.3	5.6	B, C	良好	R	内-褐灰。 外-にぶい橙	40	
6	高台付椀	HS		135	4.8	6.2	B, E, I	良好	R	にぶい黄橙	60	貯蔵穴
7	高台付椀	NS		137	5.2	5.6	B, D, E	良好	R	灰 白	30	
8	高台付椀	HS		136	4.5	6.0	B, G	普通	R	灰 白	60	貯蔵穴
9	高台付椀	NS		140	4.3	5.7	B	良好	R	灰 白	60	貯蔵穴
10	高台付椀	NS		135	6.2	5.7	B, E, I	良好	R	灰 白	50	貯蔵穴
11	高台付椀	HS		147	5.6	6.5	B, C, E	普通	L	にぶい黄橙	30	
12	高台付椀	HS		152			B, E, G	良好	R	外-にぶい橙。内-灰黄褐	20	
13	高台付椀	NS				5.3	B, E, I	良好	R	灰 黄	20	
14	高台付椀	HS				7.4	B, E, I	良好	R	内-褐灰。 外-橙	20	
15	高台付椀	NS				5.3	B, G	良好	R	灰 白	25	
16	高台付皿	NS		128	3.3	5.9	B, G, I	良好	R	灰 白	70	
17	高台付椀	黒色		15.9	6.6	6.2	B, E, G	良好	R	内-褐灰。 外-にぶい橙	50	
18	高台付椀	K		19.5			D	良好	L	外-灰白。 内-オリブ灰	10	
19	甕	BⅢa	Ⅱ	17.1			B, E, H	良好		浅 黄 橙	15	貯蔵穴
	脚付釜	H					A, B, E, H	良好		橙		

第290表 第198号住居跡出土土錫観察表

番号	色調	残存率	長さ	径	穴径	重さ(g)	型式	欠損分類	写真番号	出土位置その他
21	にぶい赤褐	100	4.0	2.4	0.5	166	B 1	I a	63	
22	にぶい赤褐	100	4.5	1.9	0.4	102	C 1	I a	173	
23	浅黄橙	100	4.5	1.8	0.4	106	C 1	I a	174	
24	褐	70		1.1	0.4	80	C 1	Ⅱ a	175	
25	浅黄橙	100	4.8	1.4	0.3	7.5	C 2	I a	440	
26	にぶい橙	90	4.8	1.0	0.2	5.5	C 2	I b	441	
27	にぶい橙	60		1.2	0.3	5.5	C 2	Ⅲ	442	
28	橙	70				3.4	C 2	Ⅱ a	443	
29	黄	100	3.1	0.9	0.2	2.9	C 2	I a	176	
30	にぶい橙	70		1.0	0.3	2.1	C 2	Ⅱ a	444	
31	橙	60		1.0	0.2	2.1	C 2	Ⅲ	445	
32	浅黄橙	80		0.8	0.2	1.3	C 2	Ⅱ b	446	
33	橙	100	3.1	0.9	0.2	1.7	C 2	I a	447	

第337図 第199号住居跡



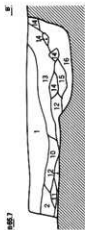
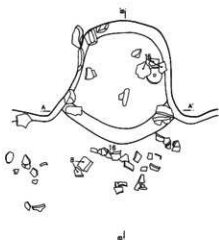
A 85.7



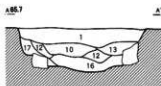
0 50cm



0 1m



A 85.7

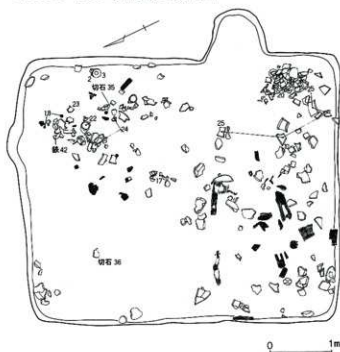


0 50cm

第199号住居跡

- 1 暗褐色土 焼土、炭化物を多量に含み、小礫を少量含む
- 2 褐色土 焼土、炭化物を少量含み、珪石、燧山ブロックを多量に含む
- 3 暗褐色土 焼土、炭化物を部分的に多量に含み、燧山ブロックを少量含む
- 4 暗褐色土 焼土、炭化物ブロックを多量に含む
- 5 暗赤褐色土 焼土を多量に含む
- 6 黒褐色土 焼土を少量含み、炭化物を多量に含む
- 7 褐色土 部分的に焼土を多量に含み、礫、砂、黄褐色土を多量に含む（陥り床）
- 8 黒褐色土 焼土を少量含み、炭を多量に含む
- 9 暗黄褐色土 焼土、炭を少量含み、燧山ブロック、礫を含む
- 10 暗褐色土 焼土を少量含む
- 11 暗褐色土 焼土を少量含み、黄白色粘土ブロックを少量含む
- 12 黒色土 炭化物主体 焼土、黄白色粘土ブロックを少量含む
- 13 暗褐色土 焼土を多量に含み、黄白色粘土ブロックを少量含む
- 14 暗褐色土 焼土を多量含み、炭化物ブロックを少量含む
- 15 黒褐色土 焼土、炭化物を少量含む
- 16 暗黄褐色土 焼土を少量含み、炭を少量含む、砂礫を多量に含む
- 17 暗褐色土 焼土を少量含み、炭、礫を少量含む

第338図 第199号住居跡遺物分布図



12は底部、13・15は口縁部が欠損している。14は底部のみである。

16は、須恵器（NS）の高台付皿である。

17は、黒色土器の高台付碗である。高台が欠損している。

18は、灰相陶器の高台付碗である。底部が欠損している。

19は、土師器の甕である。20は、土師器の脚付釜の

脚部である。19は胴部中位以下が欠損している。

21から33は、土錘である。

34から39は、鉄製品である。34は板状鉄製品（不明）、35から39は角棒状鉄製品である。

以上、出土遺物から第198号竪穴式住居跡を中堀Ⅵ期に位置付けたい。

第199号住居跡（第337図・第338図・第339図・第340図・第341図）

S・T-17・18グリッドで確認した。周辺の遺構は、疎らであった。

住居跡の形状は、長方形であった。規模は、長さ5.16m・短辺4.17m・深さ0.31mであった。北壁のやや東寄りに、小さな張り出しを検出した。この張り出し部とカマドから貯蔵穴を除いて、幅0.3mの壁溝を検出した。また住居跡の

南壁中央から径0.45m・深さ0.15mの小穴を検出した。

床面から炭化材が多量に出土したことから、いむゆる焼失住居と判断した。

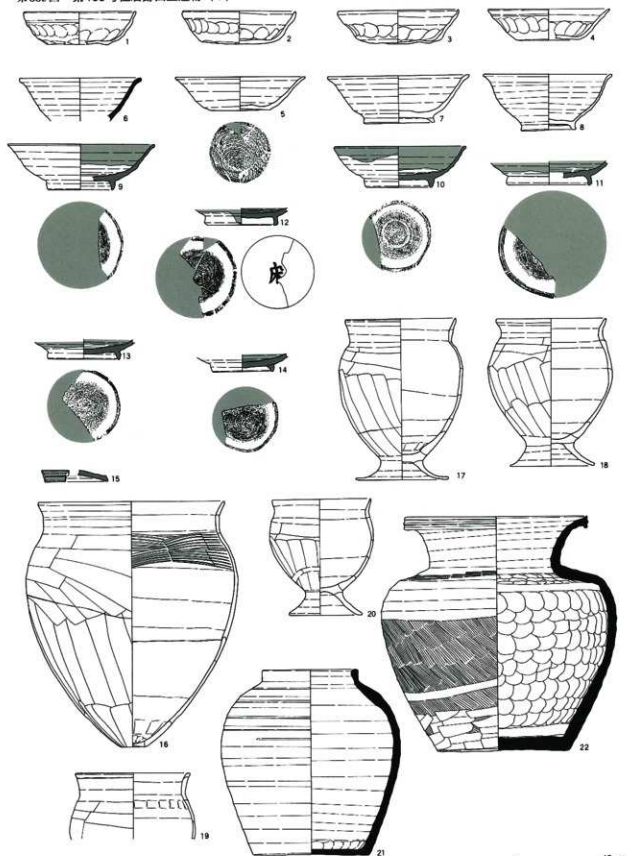
主軸方位は、N-12°-Eであった。

カマドは、東壁の南寄りに検出した。袖は検出されず、当初から造られなかったと判断した。燃焼部は、整った方形で、燃焼部の底面には円形の掘り込みがみられた。

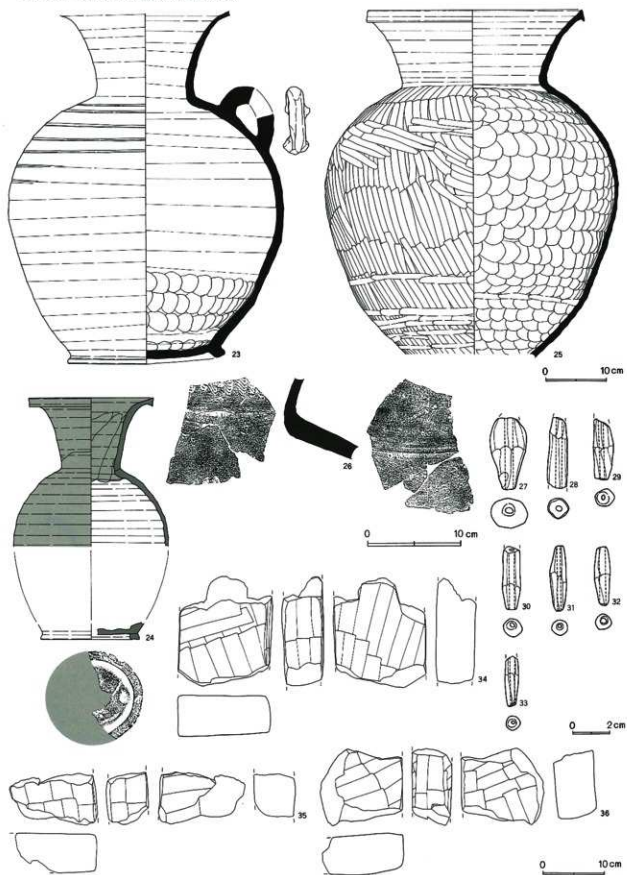
第291表 第199号住居跡出土遺物観察表（1）

番号	器種	種別	口径	器高	身	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
1	坏	A VI	H	11.8	3.5	6.6	B, D	良 好		暗 橙	40	
2	坏	A IV	H	11.9	3.5	5.2	B, D, E, G	普通		橙	100	
3	坏	A VI	H	12.7	3.6	6.4	B, D, E, H	普通		暗 橙	100	
4	坏	A VI	H	12.8	3.3	6.2	B, D, E	普通		黄 褐	30	
5	碗	NS	S	13.6	3.6	6.3	B, D, E	良 好	R	灰 白	60	
6	高台付碗	S	S	12.7			B, D	良 好	R	灰	20	
7	高台付碗	NS	S	15.1	5.0	7.3	B, E, G	良 好	R	灰 白	50	貯蔵穴
8	高台付碗	HS	S	13.3	5.9	5.5	B, C	良 好	R	灰 黄	90	貯蔵穴・カマド
9	高台付碗	K	K	15.4	4.8	6.7	B, D	良 好		淡 灰 白	40	
10	高台付碗	K	K	13.9	4.3	6.9	B, D	良 好		灰 白	50	
11	高台付碗	K	K			8.6	D	良 好		淡 灰 白	20	
12	高台付碗	K	K			7.1	B	普通		淡 灰 白	20	
13	高台付碗	K	K			7.4	B, D	良 好		淡 灰 白	20	
14	高台付碗	K	K			6.1	B	良 好		淡 灰 白	20	
15	蓋	K	K				D	良 好		淡 灰 褐	10	
16	甕	B I a	H	19.7	25.9	2.6	B, D, E	良 好		浅 黄 橙	80	カマド

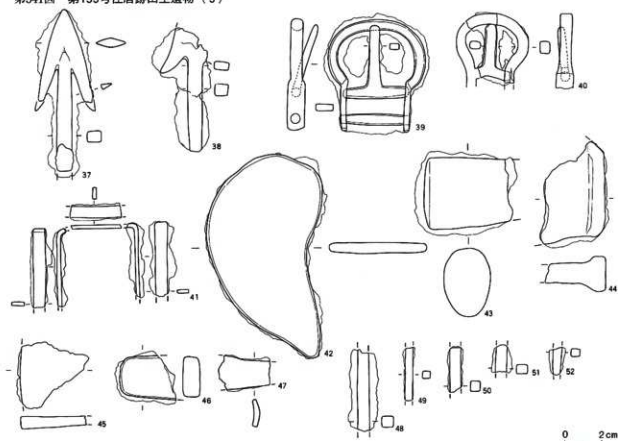
第339图 第199号住居跡出土遺物(1)



第340图 第199号住居跡出土遺物(2)



第341図 第199号住居跡出土遺物(3)



第292表 第199号住居跡出土遺物観察表(2)

番号	器種	種別	口径	器高	胴	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他	
17	台付甕	H	11.6	17.0		9.2	B, H	やや不良		橙	80	カマド	
18	台付甕	H	11.5	15.6		8.8	B, H	良好		橙	90		
19	台付甕	H				11.9	D, E	普通		橙	20		カマド
20	台付甕	H	10.3	12.2		7.4	B, D, E	普通		橙	90		
21	短頸壺	S	9.9	19.5		12.2	B, G	良好	R	暗灰色(やや赤色の焼きムラあり)	80		
22	短頸壺	S	19.2	25.0		14.9		良好		暗灰	100		口縁一部欠損
23	長頸壺	S	19.7	38.7	15.8					暗灰			
24	長頸壺	K	13.1	25.4		10.3	D	普通		淡灰白			
25	大甕	S	34.2	58.2				良好		暗灰褐	70		
26	大甕	S					B, E, K	良好		青灰	5		

第293表 第199号住居跡出土土鐘観察表

番号	色調	残存率	長さ	径	穴径	重さ(g)	型式	欠損分類	写真番号	出土位置その他	
27	褐	灰	50		2.0	0.4	9.0	C 1	Ⅲ a	177	
28	橙		60		1.2	0.4	3.9	C 2	Ⅱ b	448	
29	にぶい	橙	80		1.0	0.3	2.9	C 2	Ⅱ a	449	
30	浅黄	橙	70		1.0	0.3	2.8	C 2	Ⅱ a	450	
31	浅黄	橙	100		0.8	0.2	1.9	C 2	I c	451	
32	浅黄	橙	100	3.1	0.9	0.3	1.8	C 2	I a	452	
33	浅黄	橙	60		0.7	0.2	1.4	C 3	Ⅱ a	645	

貯蔵穴は、カマド右脇に検出した。形状は、不整形形で規模は、径1.02m・深さ0.12mであった。

遺構の切り合いは、みられなかった。

遺物は、カマド内や前面から須恵器の高台付椀(8)、土師器の甕(16)が、カマド右脇から土師器の台付甕(20)、須恵器の大甕(25)が出土した。住居跡の北東部から土師器の坏(2・3)、須恵器の甕(22)・把手付壺(23)、灰釉陶器の長頸瓶(24)、凝灰岩の切石(35)が出土した。

1から4は、土師器の坏である。2は、坏ANである。他は、坏AMである。4は底部が欠損している。

5は、須恵器(NS)の椀である。

6は、須恵器(S)の高台付椀である。底部が欠損している。

7・8は、高台付椀である。7は須恵器(NS)、8は須恵器(HS)である。

9から14は、灰釉陶器の高台付椀である。12は底部外面に墨書「床」がみられる。15は、灰釉陶器の蓋である。9は底部、11は口縁部と底部が欠損している。12から14は底部のみ、15は口縁部のみである。

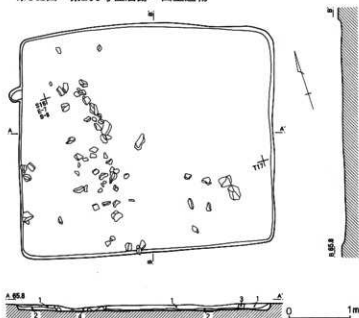
16から20は、土師器の甕である。19は胴部下位以下が欠損している。

21・22は、須恵器(S)の短頸壺である。23は、須恵器(S)の長頸壺である。24は、灰釉陶器の長頸瓶である。25・26は、須恵器(S)の大甕である。23は口縁部、24は胴部下位、25は底部が欠損している。26は胴部破片である。

27から33は、土鍾である。

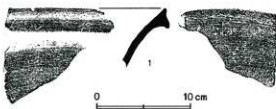
34から36は、凝灰岩の切石である。

第342図 第200号住居跡・出土遺物



第200号住居跡

- 1 凝灰陶器土 黒土粒子を少量含む、白色粒子を多量に含む、粘土ブロックを少量含む
2 埴裏陶器土 白色粒子を多量に含む
3 埴輪陶器土 黒土粒子を少量含む 粘土あり
4 埴灰陶器土 砂質



37から52は、鉄製品である。37・38は鉄鎌、39・40は鉸具、41は不明品、42は板状不明鉄製品、43は金槌か、44から47は延板及び板状鉄製品、48から52は棒状鉄製品である。

以上、出土遺物から第199号竪穴式住居跡を中堀V期に位置付けた。

第200号住居跡(第342図)

S・T-16・17グリッドで確認した。周辺は、土壌・小穴などがみられたが、疎らであった。

第294表 第200号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	鈎	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
1	大	甕	S				A, B, C, H	良	好	灰白	5	

住居跡の形状は、方形であった。規模は、長辺4.05 m・短辺3.53 m・深さ0.08 mであった。

主軸方位は、N-19°-Eであった。

カマドは検出されなかった。

住居跡の西半分から川原石が、多量に出土した。

遺構の切り合いは、みられなかった。

1は、須恵器(S)の大甕である。口縁部破片である。

以上、出土遺物から第200号竪穴式住居跡の時期を決定することは不可能であった。

第201号住居跡 (第343図)

U-17・18グリッドで確認した。周辺の遺構は疎らであった。

住居跡の形状は、長方形であった。規模は、長辺3.05 m・短辺2.38 m・深さ0.20 mであった。

主軸方位は、N-91°-Eであった。

カマドは、東壁の中央で検出した。袖は、検出できなかった。燃焼部の位置から、左袖が短く造り付けら

れていたと推定した。燃焼部の掘り込みはみられなかった。焚き口部の前面から川原石が、まとまって出土した。構築材であろう。

遺構の切り合いは、みられなかった。

1は、須恵器(HS)の高台付碗である。底部が欠損している。

2は、土師器の甕である。胴部中位以下が欠損している。

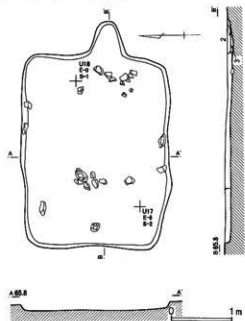
以上、出土遺物から第201号竪穴式住居跡を中堀V期に位置付けたい。

第202号住居跡 (第344図・第345図・第346図・第347図・第348図・第349図)

Q・R-20グリッドで確認した。周辺は、住居跡・掘立柱建物跡・土壇などの遺構は密集していた。また砂利層が確認面のため、確認作業が困難であった。

住居跡の形状は、長方形であった。規模は、辺5.79 m・短辺4.48 m・深さ0.44 mと、比較的大形の住居跡であった。住居跡の中央やや北東寄りに、二基の小穴

第343図 第201号住居跡・出土遺物



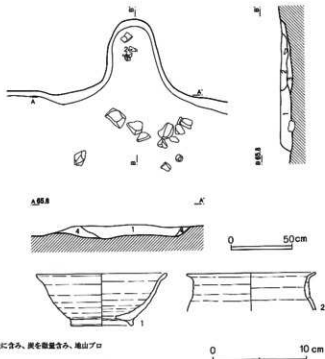
第201号住居跡

1 埴埴色土 焼土、炭化物を微量含み、日経石を少量含む、礫を多量に含む

2 埴埴色土 焼土ブロックを多量含み、日経石を少量含む

3 埴埴色土 焼土を多量に含み、炭を微量含み、地山ブロックを少量含む

4 埴埴色土 焼土、炭化物を微量含み、地山ブロック、礫、日経石を少量含む



を並んで検出した。

カマドは、北壁の北東寄りと東壁の南東寄りに二基検出した。覆土の状況から、1・2号カマドとも、住居跡の埋没まで共用していたと推定した。

1号カマドの袖は検出できず、当初から造られなかったと判断した。燃焼部は、不整楕円形に掘り込まれ、奥に向かって深くなっていた。

2号カマドの袖は検出できず、1号カマドと同様に

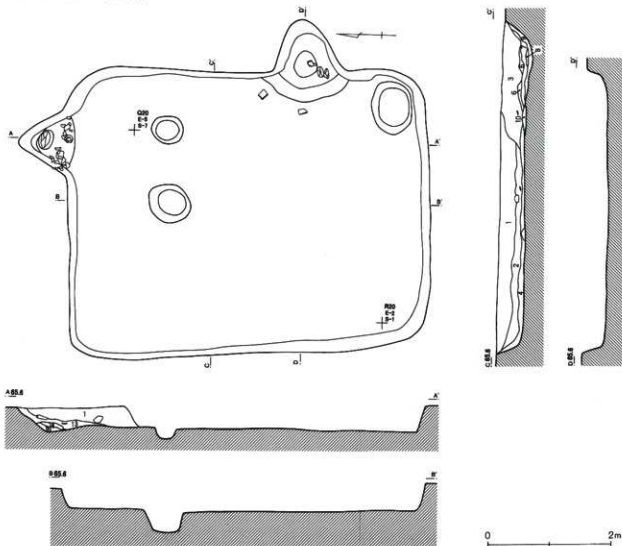
当初から造られなかったと判断した。焚き口部から燃焼部にかけては、円形に掘り込みがみられ、底面に小さな凹凸がみられた。

貯蔵穴は、2号カマドの右側隅に検出した。形状は、楕円形で規模は、長さ0.83m・短径0.65m・深さ0.16mであった。

遺構の切り合い関係は、集石列より古かった。

遺物は、1号カマド内から土師器甕(52・60)が、

第344図 第202号住居跡



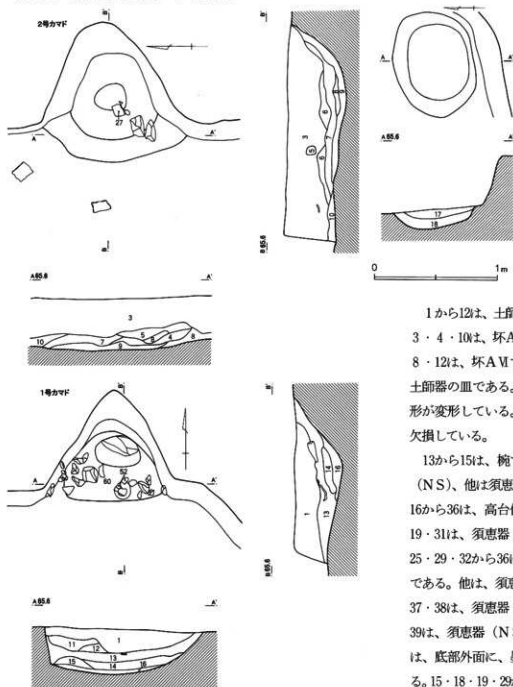
第202号住居跡

- 1 暗褐色土 焼土、大形礫、砂利を多量に含む
- 2 暗褐色土 焼土、砂利を少量含む 粘質あり
- 3 暗褐色土 焼土、炭を多量に含む、暗褐色土ブロックを少量含む
- 4 暗褐色土 焼土を少量含む、砂を少量含む 粘質あり
- 5 暗褐色土 砂を少量含む 粘質土
- 6 暗褐色土 焼土を少量含む、砂を多量に含む

- 7 暗褐色土 焼土主体 粘質あり(天井部崩壊土)
- 8 黒色土 炭を多量に含む 粘質あり
- 9 暗褐色土 焼土、炭、砂を多量に含む、粘質のある暗褐色土ブロックを少量含む
- 10 暗褐色土 焼土、暗褐色土を少量含む
- 11 暗褐色土 焼土を多量に含む 粘質あり
- 12 暗褐色土 焼土を多量に含む 砂質

- 13 暗褐色土 焼土を多量に含む、暗褐色土を少量含む 粘質あり
- 14 暗褐色土 焼土を少量含む 粘質あり
- 15 暗褐色土 焼土、砂を少量含む
- 16 暗褐色土 焼土、砂を多量に含む
- 17 暗褐色土 焼土、炭を少量含む 砂を含む
- 18 暗褐色土 焼土、炭を少量含む 砂利を少量含む

第345図 第202号住居跡カマド・貯蔵穴



2号カマドから須恵器の高台付椀(27)が、貯蔵穴内から土師器の杯(5)、須恵器の高台付椀(25)、土師器の甕(50・56)、鉄製品(83)が出土した。また、住居跡の中央から西側にかけて須恵器の大甕(63)が散乱して出土した。また石製巡方(82)が、住居跡の中央やや北寄りから出土した。そのほか住居床面から、大形の川原石と、多量の土器が出土した。

1から12は、土師器の杯である。1・3・4・10は、杯AⅤである。2・5・8・12は、杯AⅥである。9・11は、土師器の皿である。11は、熱を受け器形が変形している。9から11は底部が欠損している。

13から15は、椀である。13は須恵器(NS)、他は須恵器(HS)である。16から36は、高台付椀である。16から19・31は、須恵器(S)である。24・25・29・32から36は、須恵器(HS)である。他は、須恵器(NS)である。37・38は、須恵器(S)の皿である。39は、須恵器(NS)の皿である。35は、底部外面に、墨書「床」がみられる。15・18・19・29から34は口縁部、22・23・27・28・39は底部、26は高台が欠損している。35・36は底部のみである。

40から42は、灰釉陶器の高台付椀である。43から45は、灰釉陶器の高台付皿である。41・43は底部、42は口縁部が欠損している。44・45は底部のみである。

46から60は、土師器の甕である。61は、灰釉陶器の長頸壺である。62は、灰釉陶器の小瓶である。63から66は、須恵器(S)の大甕である。46から49・51・53・

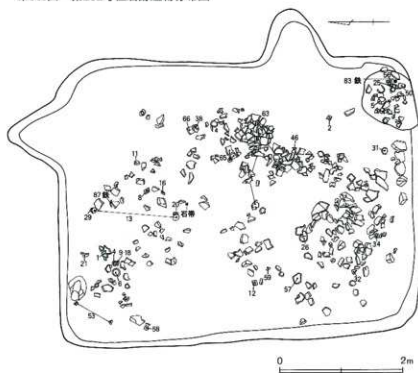
第295表 第201号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	胴	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
1	高台付碗	H S	13.7	5.5		6.3	B, C, E, I	良好	R	浅黄橙	20	カマド
2	甕	B II a	13.5				B, E, H	良好		橙	30	カマド

第296表 第202号住居跡出土遺物観察表 (1)

番号	器種	種別	口径	器高	胴	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
1	坏	A IV	H	11.8	3.9	7.1	B, D, E	普通		黄褐	40	
2	坏	A VI	H	11.8	3.9	5.2	B, D, E	普通		黄褐	40	
3	坏	A IV	H	12.1	3.4	7.6	D, E, H	普通		黄褐	60	
4	坏	A IV	H	12.9	3.4	8.5	B, D, E	普通		黄橙	100	カマドA
5	坏	A VI	H	12.9	3.3	7.8	B, D, E	普通		黄橙	60	貯穴
6	坏	A	H	12.1	3.4	7.2	B, E	普通		淡橙	100	
7	坏	A	H	12.0	3.4	7.9	B, D, E	普通		黄褐	40	
8	坏	A VI	H	12.2	3.3	7.1	B, D, E	普通		淡橙	70	
9	皿	H	H	13.0	3.3	9.5	B, D, E, H	普通		茶褐	30	貯穴
10	坏	A IV	H	12.0	3.3	6.7	B, D	普通		黄褐	20	
11	皿	H	H	12.6	2.8	6.9	B, E, H	普通		灰褐	30	カマドA
12	坏	A VI	H	11.0	3.1	5.6	B, E, H	普通		淡黄	30	
13	碗	N S	H S	11.6	3.9	5.3	B, E, I	良好		黄灰	90	
14	碗	H S	H S	12.8	4.0	6.1	B, E, I	普通		黄	70	
15	碗	H S	H S			5.8	B, G, I	良好	R	にぶい黄橙	30	
16	高台付碗	S	S	12.7	5.3	7.1	B, D	良好	R	灰	70	
17	高台付碗	S	S	13.7	5.5	6.3	B	良好	R	灰	20	
18	高台付碗	S	S			6.8	B, D	良好	R	灰	20	
19	高台付碗	S	S			5.7	B	良好	R	灰	50	

第346図 第202号住居跡遺物分布図



54・55は胸部中位以下、50・52・56は胸部下位以下、57は胸部中位以上と脚部、58・59は胸部中位以上、62は口縁部と底部が欠損している。60・61は底部のみ、64は口縁部のみである。65・66は口縁部破片である。

67から81は、土鏝である。

82は、石製腰帯具(石帯)の巡方である。

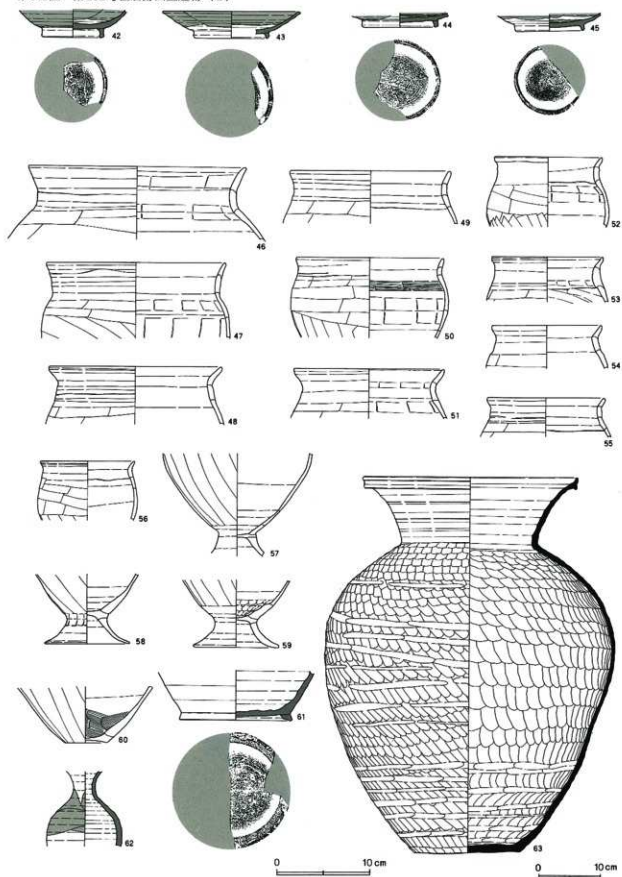
83は、銅製の半管状金具と棒状鉄製品が付着したものである。84は刀子、85は刀子の刃部、86・87は釘、88は棒状鉄製品である。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第202号竪穴式住居跡を中堀V期に位置付けたい。

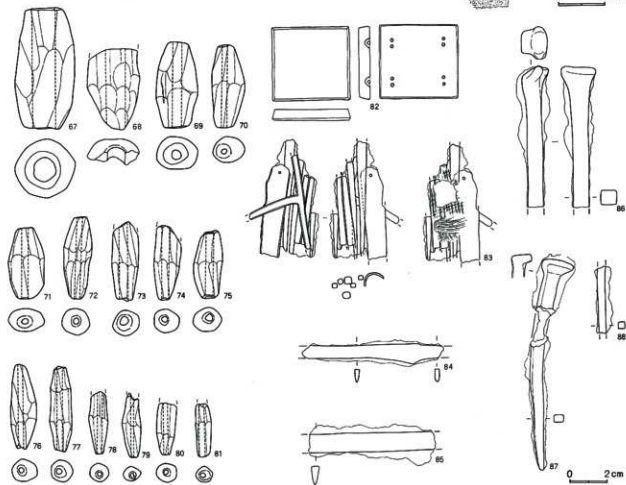
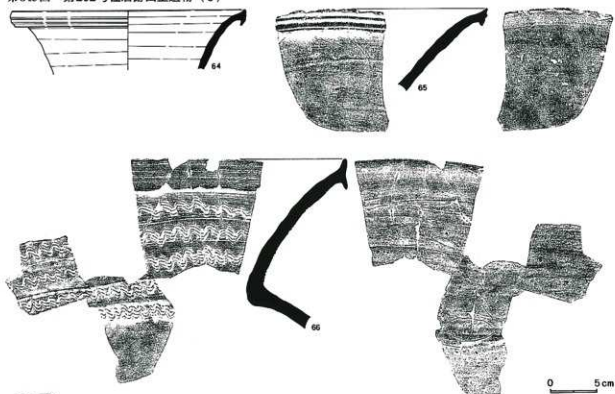
第347图 第202号住居跡出土物(1)



第348图 第202号住居跡出土遺物(2)



第349図 第202号住居跡出土遺物(3)



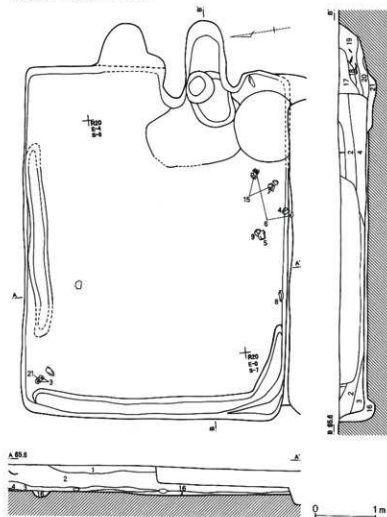
第297表 第202号住居跡出土遺物観察表(2)

番号	器種	種別	口径	器高	胴	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他	
20	高台付	碗	NS	11.4	4.4		5.1	B, E, G	良好	R	灰白	80	
21	高台付	碗	NS	13.8	6.0		6.3	B, E, I	普通	R	灰白	90	
22	高台付	碗	NS	13.8				B, I	良好	R	灰	20	
23	高台付	碗	NS	15.4				B, D	良好	R	灰白	20	
24	高台付	碗	HS	14.6	5.2		6.5	B, E, I	良好	R	にぶい黄橙	95	貯穴
25	高台付	碗	HS	14.4	5.0		6.2	B, E, I	普通	R	にぶい黄橙	50	貯穴
26	高台付	碗	NS	13.3				B, E	良好	R	灰黄	100	高台欠損
27	高台付	碗	NS	18.4				B, E	良好	R	灰白	10	カマダA
28	高台付	碗	NS	18.8				B, E	良好	R	灰白	20	
29	高台付	碗	HS				6.3	B, C, I	良好	R	にぶい橙	40	
30	高台付	碗	NS				7.3	B, E	良好	R	灰白	30	
31	高台付	碗	S				6.8	B, D	良好	R	灰白	30	
32	高台付	碗	HS				5.5	B, C, E, I	良好	R	にぶい黄橙	30	
33	高台付	碗	HS				5.4	B, E, I	良好	R	にぶい黄橙	30	
34	高台付	碗	HS				5.0	B, E, I	普通	R	にぶい黄橙	30	
35	高台付	碗	HS				5.9	B, D, E, H	普通	R	にぶい黄橙	30	
36	高台付	碗	HS				7.1	B, C, E, I	良好	R	にぶい橙	20	
37	皿	S		12.2	2.4		4.7	B	良好	R	灰	25	
38	皿	S		12.2	1.8		5.4	B	良好	R	灰	60	
39	高台付	皿	NS	12.8	2.6		6.0	B, I	良好	R	褐灰	25	
40	高台付	碗	K	14.1	4.1		7.1	B, D	良好	R	灰白	30	
41	高台付	碗	K				10.2	B	良好	R	淡灰白	20	
42	高台付	碗	K				5.9	B	良好	R	灰白	10	
43	高台付	皿	K	14.3	2.9		7.7	B	良好	L	灰白	25	
44	高台付	皿	K				7.4	B, D	良好	R	灰白	20	
45	高台付	皿	K				6.8	B, D	良好	R	淡灰白	20	
46	甕A	I b	H	22.9				B, E, H	良好	R	橙	25	
47	甕A	III c	H	18.9				B, C, E	良好	R	浅黄橙	15	
48	甕B	III a	H	18.3				B, D, E	良好	R	浅黄橙	25	
49	甕B	III a	H	16.9				B, C, E	良好	R	浅黄橙	20	
50	甕A	I c	H	15.5				B, C, E	良好	R	浅黄橙	30	貯穴
51	甕B	III a	H	16.0				B, D, E	良好	R	橙	20	
52	台付	甕	H	11.3				B, D, E	良好	R	浅黄橙	30	
53	台付	甕	H	11.7				B, C, H	良好	R	橙	70	
54	台付	甕	H	11.5				B, E, H	良好	R	にぶい黄橙	40	カマダA
55	台付	甕	H	12.2				B, C, E, H	良好	R	浅黄橙	40	
56	台付	甕	H	10.0				B, E	良好	R	にぶい黄橙	25	貯穴
57	台付	甕	H					B, C, E, H	良好	R	橙	90	
58	台付	甕	H				8.9	B, E	良好	R	橙	50	脚部-70, 他-40
59	台付	甕	H				8.6	B, E, H	良好	R	橙	40	
60	甕	底	H				4.5	B, C, H	良好	R	にぶい橙	100	カマダB
61	長	瀬	K				11.7	B	良好	R	灰白	10	
62	小	瀬	K					B	良好	R	灰白	40	
63	大	甕	S	17.0	30.0		8.4	B	良好	R	青灰	60	
64	大	甕	S					B	普通	R	青灰	10	
65	大	甕	S					B	普通	R	青灰	10	
66	大	甕	S					B	普通	R	青灰	10	

第298表 第202号住居跡出土土錐観察表

番号	色	調	残存率	長さ	径	穴径	重さ(g)	型式	欠損分類	写真番号	出土位置その他
67	にぶい	黄橙	100	6.4	3.2	1.2	64.1	A 1	I b	16	
68	にぶい	黄橙	30				12.2	B 1	Ⅳ	64	
69	にぶい	橙	100	4.6	2.2	0.5	17.0	B 1	I a	65	
70	浅	黄	100	4.4	1.7	0.3	10.0	C 1	I a	178	
71		橙	100	3.8	2.0	0.3	9.3	C 1	I a	179	
72	にぶい	橙	100	4.4	1.5	0.3	8.5	C 1	I a	180	
73	にぶい	褐	70		1.4	0.4	6.7	C 1	Ⅲ b	181	
74		橙	60		1.4	0.3	5.2	C 1	Ⅲ a	182	
75	にぶい	橙	100	3.6	1.5	0.4	6.7	C 1	I a	183	
76	褐	灰	100	4.6	1.3	0.3	6.7	C 2	I c	453	
77	褐	灰	100	4.5	1.2	0.3	5.8	C 2	I a	454	
78	黄	橙	70		1.0	0.2	2.3	C 2	Ⅱ b	455	
79	黄	橙	80		1.0	0.2	1.8	C 2	Ⅱ b	456	
80	黄	橙	50		1.1	0.2	2.2	C 2	Ⅱ b	457	
81		橙	70		0.9	0.3	1.8	C 3	I c	458	

第350図 第203号住居跡



第203号住居跡 (第350図・第351図・第352図)

R-19・20グリッドで確認した。周辺は、遺構が比較的疎らだが、住居跡五軒が重複し、確認に非常に手間取った。また大形の川原石が覆土中に多量に混入し、硬く締まっていたため、調査は困難を極めた。

当初は、二基のカマドを設置した一軒の住居跡と考えたが、壁溝の位置から二軒の住居跡の重複と判断した。

住居跡の形状は、長方形であった。規模は、長さ5.55m・短辺4.20m・深さ0.44mであった。北壁の一部と西壁に幅0.32mの壁溝を検出した。

主軸方位は、N-97°-Eであった。カマドは、東壁の南東寄りに検出した。袖は、暗黄褐色土で造り付け、住居跡内に短く延びていた。焚き口部の前面から燃焼部にかけては、楕円形の掘り込みがみられた。また燃焼部の左側に径0.42mの小穴を検出した。燃焼部から煙道部へは緩やか

に傾斜しながら移行していた。

遺構の切り合い関係は明瞭に把握できなかったが、第204・205・207号住居跡より古いと判断した。

遺物は、カマド内から土師器の甕(16)が、南壁際から土師器の坏(4)・皿(5・6)、須恵器の坏(9)、土師器の鉢(15)が出土した。

1から3は、土師器の坏AⅣである。4から8は、土師器の皿である。8は底部が欠損している。

9は、須恵器(NS)の椀である。10は、須恵器(NS)の高台付椀である。12から14は、蓋である。13は、須恵器(S)、他は須恵器(NS)である。15は、土師器の鉢である。10・11は底部のみである。14は天井部、15は底部が欠損している。10は朱色の付着物が底部外面に確認できる。

16・17は、土師器の甕である。胴部下位以下が欠損している。

18から21は、灰釉陶器の長頸壺である。22は、灰釉陶器の短頸壺である。23は、須恵器(S)の広口壺である。24は、器形不詳ながら高脚付盤の脚部である。25は、須恵器(S)の鉢である。26は、灰釉陶器の広口壺である。19は口縁部、22は胴部下位、25は胴部下位以下が欠損している。20・23・26は口縁部のみ、21は胴部上位のみである。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第203号竪穴式住居跡を中強Ⅱ期に位置付けた。

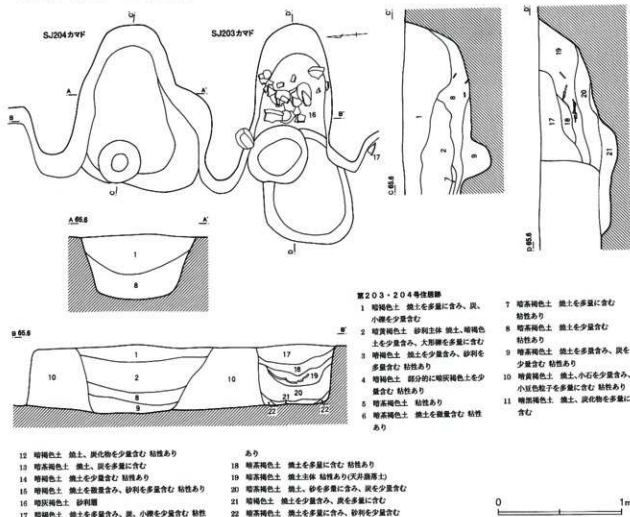
第204号住居跡(第351図・第353図・第354図)

R-19・20グリッドで確認した。周辺は、遺構が比

第299表 第203号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	径	底径	胎土	焼成	輪軸	色調	残存	出土位置その他
1	坏 AⅣ	H	117	29		7.8	R, D, E	普通		黄 褐	20	
2	坏 AⅣ	H	128	3.5		9.4	R, D, E	普通		黄 褐	60	
3	坏 AⅣ	H	107	3.1		7.3	B, D, E, H	普通		黄 橙	100	
4	皿	H	129	3.0		8.5	B, D, E	普通		淡 黄 橙	30	
5	皿	H	157	2.5		13.6	B, D, E	普通		淡 黄 橙	70	フク土
6	皿	H	161	2.4		10.5	B, C, D, E	普通		淡 黄 橙	70	
7	皿	H	147	2.4		11.9	B, E, H	普通		淡 黄 橙	30	カマド
8	皿	H	168	2.6		11.4	B, D, E	普通		淡 黄 橙	40	
9	椀	NS	13.4	4.5		7.0	B, E, I	良好	R	黄 灰	7	
10	高台付椀	NS				8.6	B	良好	R	灰 白	5	カマド
11	長頸壺	NS				9.0	B, E	良好	R	灰 白	20	
12	蓋	NS	16.1	3.1		7.7	B	良好	L	内-灰白。 外-灰	40	
13	蓋	S	15.4	3.7		5.5	B	良好	R	灰	50	
14	蓋	NS	12.7			4.9	E	良好	R	灰 白	25	
15	鉢	H	19.1			10.1	B, E	良好		橙	80	
16	甕 AⅣa	H	21.5				B, E	良好		橙		口縁-60。胴-10。 カマド1
17	甕 AⅢc	H	20.5				B, E	良好		橙	80	カマド1
18	長頸壺	K	8.2	22.7		8.3	B, D	良好		暗 赤 灰	70	S J 234, 224
19	長頸壺	K				12.2	B	良好		灰 白	30	
20	長頸壺	K	8.0				B, H	良好		暗 黒 灰	10	
21	長頸壺	K					B	良好		内-青灰。 外-オリーブ灰	5	
22	短頸壺	K	10.7				B	良好		灰 白	20	
23	広口壺	S	13.8				B, D	良好	R	灰	5	
24	器形不明 (脚部)	S				10.5	B	良好	R	黄 灰	5	
25	鉢	S	23.6				B	良好	R	灰	10	
26	広口壺	K	25.8				B, D	良好		オリーブ灰	5	

第351図 第203・204号住居跡カマド



較的疎らだったが、住居跡が五軒重複し、確認に非常に手間取った。また大形の川原石が覆土中に多量に混入し、硬く締まっていたため、調査は困難を極めた。

当初は、二基のカマドを付設した一軒の住居跡と認識していたが、第203号住居跡の壁溝を検出したことで二軒の切り合いと判断した。

住居跡の形内は、方形であった。規模は、長辺5.61m・短辺5.3m・深さ0.45mであった。北壁に幅0.35mの壁溝を検出した。

五基の小穴を検出した。このうち1号～4号小穴は、住居跡の主柱穴と判断した。また住居跡の南壁の中央に楕円形の土塊を検出した。規模は、長径1.21m・短径0.96m・深さ0.13mであった。

主軸方位はN-98°-Eであった。

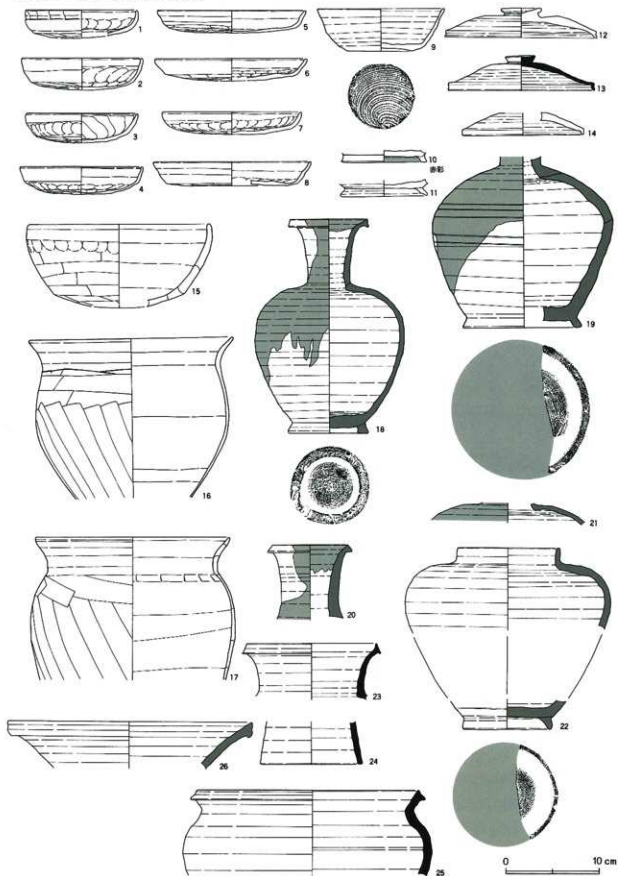
カマドは、東壁の中央で検出した。袖は、暗黄褐色土で造られ、住居跡内に短く延びていた。燃烧部は、右側がやや張り、底面は浅く窪んでいた。焚き口部には、径0.33m・深さ0.21mの小穴がみられ、焼土が多量に出土した。

貯蔵穴は、カマドの右側に検出した。形内は、円形で規模は、径1.13m・深さ0.16mであった。

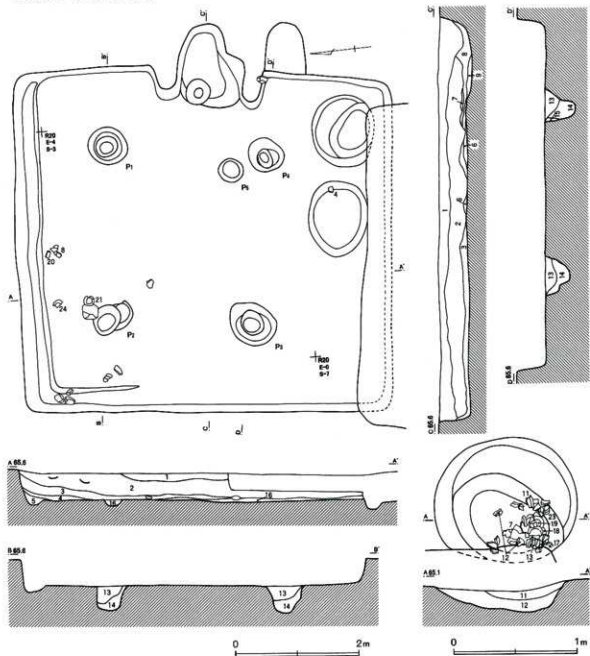
遺構の切り合い関係は、明確に把握できなかった。しかし第205・207号住居跡より古く、第203号住居跡より新しいと判断した。

遺物は、貯蔵穴内から土師器の坏(2・7・11)・皿(13)、須恵器の坏(17・18・19)、土師器の甕(23)がまとまって出土した。また住居跡の北壁中央から土師器の坏(8)、須恵器の蓋(20・21)、灰釉陶器の壺

第352图 第203号住居跡出土遺物



第353図 第204号住居跡



底部 (24) が出土した。

1 から12は、土師器の坏である。1 から9は、坏A IVである。10・11は、坏A IIである。12は、暗文土器である。13・14は、土師器の皿である。1・6・9から12・14は底部が欠損している。

15から19は、椀である。15・16は、須恵器 (S) である。他は、須恵器 (NS) である。20・21は、蓋である。20は須恵器 (HS)、21は須恵器 (NS) である。15・17は底部が欠損している。19は黒色の付着物

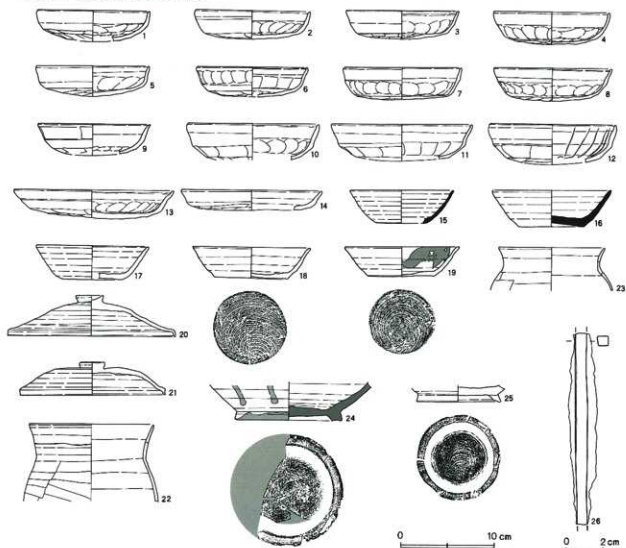
が口縁部内面に確認できる。油煙の痕跡と考えられる。

22・23は、土師器の甕である。24は、灰粘陶器の長頸壺である。25は、須恵器 (NS) の長頸壺である。22・23は胴部中位以下が欠損している。24・25は底部のみである。

26は、棒状鉄製品である。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第204号竪穴式住居跡を中堀期に位置付けたい。

第354図 第204号住居跡出土土遺物



第205号住居跡 (第356図・第357図・第358図)

R・S-19・20グリッドで確認した。周辺は、遺構が比較的疎らであったが、住居跡が五軒重複していたため、確認に非常に手間取った。

当初は、カマドを二基付設した住居跡と考えたが、土層断面の観察から二軒の重複と判断した。

住居跡の形状は、長方形であった。規模は、長辺5.37m・短辺4.2m・深さ0.50mであった。カマド部分を除き、壁面に幅0.3mの壁溝を検出した。

主軸方位は、N-99°-Eであった。

カマドは、東壁の中央に検出した。左袖は、地山を掘り残した後褐色土で造り付けていた。第206号住居跡のカマド右袖が再利用され、先端に川原石が補強材

として使用されていた。燃焼部は、不整形に掘り込まれていた。燃焼部から煙道部へは段をもって移行していた。煙道部は、長さ1.35mと細長く、煙り出し部に向い緩やかに傾斜していた。煙り出し部は、径0.2mの小穴状であった。

遺構の切り合い関係は、第207号住居跡よりも古く、第206号住居跡より新しかった。

遺物は、カマド内から須恵器の高台付碗(3)が出土した。

1から5は、土師器の坏である。3・4は、坏AⅡである。ほか4は、坏AⅡである。6・7は、土師器の皿である。4は底部が欠損している。

8は、須恵器(S)の高台付碗である。9は、須恵

第300表 第204号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	胴	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
1	坏	A	H	11.8		8.9	B, D, E, H	普通		暗黄橙	50	貯穴・フク土
2	坏	A IV	H	12.1	3.0	7.8	B, D, E	普通		黄褐	100	貯穴
3	坏	A IV	H	11.9	3.0	7.0	B, D, E	不良		灰褐	60	
4	坏	A IV	H	12.2	3.5	7.3	B, D, E	普通		暗黄橙	90	
5	坏	A IV	H	11.9	3.2	7.0	B, E, G	普通		黄橙	30	カマド
6	坏	A IV	H	11.6	3.1	7.0	B, E	普通		黄橙	80	
7	坏	A IV	H	12.3	3.3	9.6	B, D, E	普通		淡黄橙	70	貯穴
8	坏	A IV	H	12.4	3.5	8.3	B, D, E, H	普通		淡黄褐	80	
9	坏	A IV	H	11.7		6.6	B, D, E	普通		淡黄	50	
10	坏	A II	H	13.9		9.8	B, D, E	普通		黄褐	20	カマド
11	坏	A II	H	14.9		9.9	B, D, E	普通		黄褐	30	貯穴
12	坏	(暗文)	H	13.2		10.0	B, E, G	普通		黄褐	30	貯穴
13	皿	H	16.8	3.0		9.3	B, D, E	普通		淡橙	90	貯穴
14	皿	H	14.8	2.2		10.6	B, E, H	不良		淡黄褐	20	
15	輪	S	10.9	3.5		5.4	B	良好	R	灰	20	
16	輪	S	12.5	3.9		7.0	B	良好	R	灰白	25	
17	輪	NS	11.7	3.5		6.3	B, E, I	良好	R	灰白	40	貯穴
18	輪	NS	12.3	3.2		7.8	B, D	良好	R	灰白	95	貯穴
19	輪	NS	12.0	3.1		7.1	B, E, G	普通	R	灰	100	貯穴
20	蓋	HS	17.7	4.3		3.9	B, E, I	良好	R	橙	80	
21	蓋	NS	15.3	3.5		5.2	B, C, E, I	良好	R	灰白	90	
22	甕	A III e	H	13.1			B, D	良好		浅黄橙	20	
23	台付甕	H	11.2				B, E, H	良好		橙	60	貯穴
24	長頸壺	K				11.1	B, D	良好		オリーブ灰	60	
25	長頸壺	NS				8.7	B, G	良好	R	灰白	20	

器 (NS) の蓋である。8は口縁部、9は天井部が欠損している。

10は、土師器の甕である。胴部中位以上と脚部が欠損している。

11は、須恵器 (S) の甕である。口縁部のみである。

12は、土鍾である。

13・14は、凝灰岩の切石である。

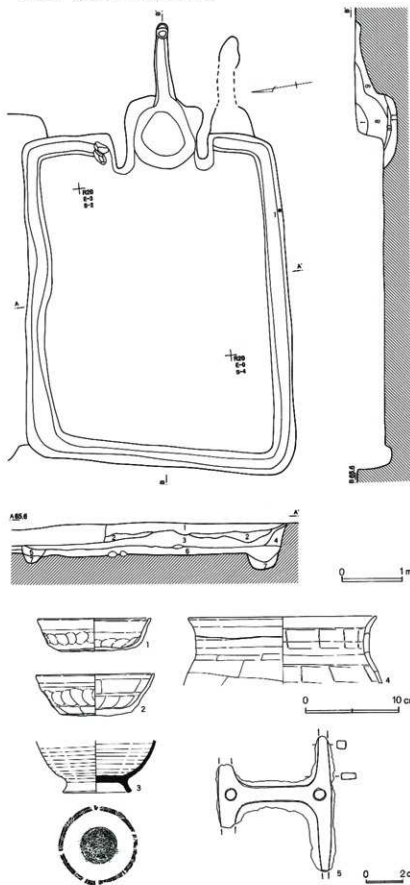
15・16は、鉄製品である。15は板状鉄製品、16は火打鎌である。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第205号堅穴式住居跡を中堀Ⅱ期に位置付けたい。

第301表 第205号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	胴	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
1	坏	A IV	H	12.0	3.6	7.8	B, D, E	良好		黄褐	50	貯穴
2	坏	A IV	H	11.8	3.5	8.4	B, D, E, H	普通		暗黄橙	70	貯穴
3	坏	A II	H	13.7	3.6	10.9	B, D, E, H	普通		黄褐	50	カマド1
4	坏	A IV	H	13.9	4.2	8.8	B, E, H	普通		黄橙	20	
5	坏	A II	H	14.1	4.6	8.7	B, E	普通		橙	70	貯穴
6	皿	H	15.6	2.9		12.2	B, D, E	普通		黄褐	100	貯穴
7	皿	H	14.6	2.5		11.2	B, E, H	普通		黄褐	200	
8	高台付輪	S				7.9	B	良好	R	黄褐	20	
9	蓋	NS	17.0	2.7		3.8	B, D	良好	R	灰白	25	
10	台付甕	H					B, C, H	良好		橙	60	胴下位-25, 他-80
11	甕	S	19.0				B	良好	R	灰	5	貯穴

第355図 第206号住居跡・出土遺物



第206号住居跡 (第355図・第356図)

R・S-19・20グリッドで確認した。周辺は、遺構が比較的疎らであったが、住居跡五軒が重複し、確認に非常に手間取った。当初は、二基のカマドを付設した一軒の住居跡と考え調査を始めたが、断面観察から重複した二軒の住居跡と判断した。

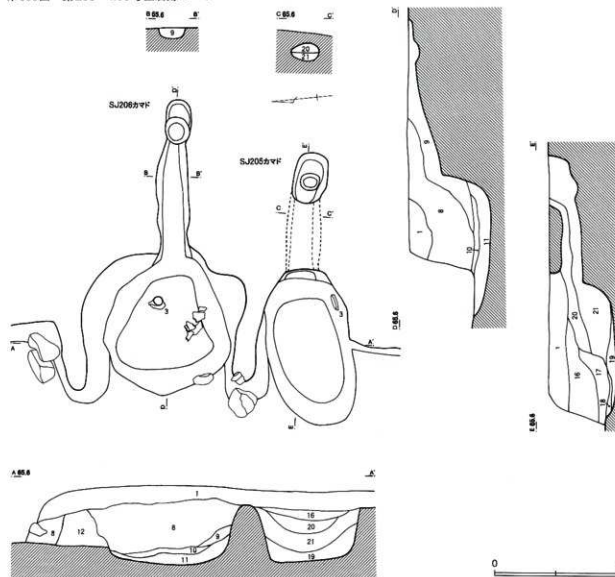
住居跡の形状は、長方形であった。規模は、長辺5.30m・短辺3.91m・深さ0.53mであった。住居跡の北西隅から南壁にかけては、幅0.35mの壁溝を検出した。また、南壁の中央で長径1.27m・短径0.5m・深さ0.28mの楕円形の土壇を検出し、多量の炭化物を出土した。

主軸方位は、N-98°-Eであった。

カマドは、東壁のやや南寄りに検出した。地山を掘り残して左袖を造り、住居跡内に短く伸びていた。右袖は、第205号住居跡のカマドの構築時に破壊したのか、検出できなかった。

焚き口部から燃焼部にかけて楕円形の掘り込みがみられた。燃焼部から煙道部へは段をもって移行していた。煙道部は、地山を掘り抜いて造られていた。長さ1.15m

第356図 第205・206号住居跡カマド



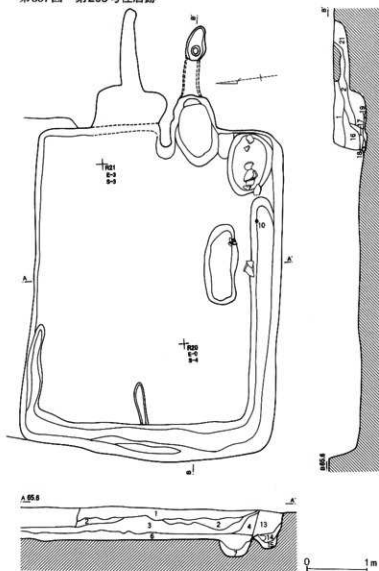
第302表 第206号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	胴	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
1	坏 A	IV	11.8	3.5		7.0	B, D, E	普通		淡橙	80	
2	坏 A	II	12.4	4.4		7.6	D, E	普通		淡黄橙	80	
3	高台付碗	S				6.7	B, D	良好	R	褐灰	70	カマド
4	美皿 III b	H	19.8				B, C, E	良好		橙	20	カマド

第303表 第206号住居跡出土土鉢観察表

番号	色調	残存率	長さ	径	穴径	重さ(g)	型式	欠損分類	写真番号	出土位置その他
20	橙	90	3.8	1.0	2.0	5.0	C 2	I b	459	

第357図 第205号住居跡



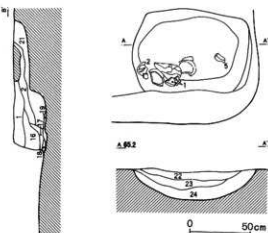
と細長く、底面は、煙り出し部に向かい緩やかに傾斜していた。煙り出し部は、長径0.39mの楕円形の小穴で底面が、煙道部よりやや深く掘り込まれていた。

遺構の切り合い関係は、第205・207号住居跡より古く、第203・204号住居跡より新しかった。

遺物は、カマド内から土師器の坏(3)が出土し、住居跡の南壁から土師器の台付甕(10)が出土した。

1・2は、土師器の坏である。1は坏AⅠ、2は坏AⅡである。

3は、須恵器(S)の高台付碗である。口縁部が欠損している。



第205・206号住居跡

- 1 暗褐色土 焼土を多量に含み、灰を少量含み、小礫を部分的に含む 粘性あり
- 2 暗黄褐色土 焼土、砂を多量に含む
- 3 暗褐色土 焼土、灰を多量に含み、暗黄褐色土を少量含む
- 4 黒褐色土 炭化物を少量含み、砂を多量に含む
- 5 暗褐色土 住居址層土 焼土を多量に含み、灰を少量含む
- 6 暗褐色土 焼土、灰を少量含む、暗褐色土をブロック状に少量含む 粘性あり
- 7 暗黒褐色土 砂子粗い 焼土、炭化物を多量に含む 粘性あり
- 8 暗黒褐色土 焼土を多量に含む 粘性あり
- 9 赤褐色土 焼土層(天井部跡層上)
- 10 黒色土 炭化物層(煙道跡)
- 11 暗赤褐色土 焼土、炭化物を多量に含む 粘性あり
- 12 褐色土 粘性あり(袖部跡層上)
- 13 暗褐色土 焼土、炭化物を少量含み、小砂粒を多量に含む
- 14 暗黄褐色土 砂利土層 焼土、暗褐色土を少量含む
- 15 暗褐色土 焼土を少量含む、砂利を多量に含む 粘性あり
- 16 暗褐色土 焼土、炭化物を多量に含む
- 17 暗赤褐色土 焼土を少量含む 粘性あり
- 18 黒色土 炭化物層(煙道跡)
- 19 暗赤褐色土 焼土を多量に含む 粘性あり
- 20 暗赤褐色土 焼土土層 粘性あり(天井部跡層上)
- 21 暗赤褐色土 焼土、砂を多量に含む、灰を少量含む
- 22 暗褐色土 焼土、灰を少量含む、部分的に暗褐色土を少量含む 粘性あり
- 23 暗赤褐色土 焼土を多量に含み、灰を少量含む 粘性あり
- 24 暗赤褐色土 焼土を少量含む

4は、土師器の甕である。胴部中位以下が欠損している。

5は、不明鉄製品である。

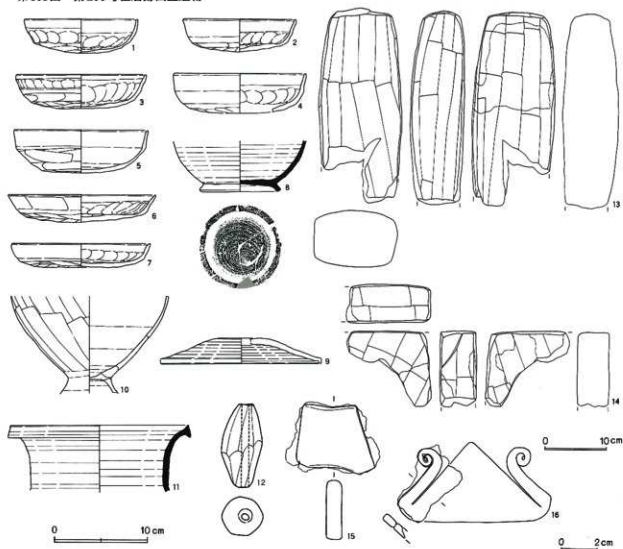
以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第206号竪穴式住居跡の時期を決定することは不可能であった。

第207号住居跡(第359図)

R-19・20グリッドで確認した。周辺は、遺構が比較的疎らであったが、住居跡五軒が重複し、確認に非常に手間取った。

住居跡の形状は、方形であった。規模は、長辺3.62

第358図 第205号住居跡出土遺物



m・短辺3.18m・深さ0.26mであった。

主軸方位は、N-90°-Eであった。

カマドは、東壁の南寄りに検出した。袖は、暗褐色土で造り付け、住居跡内に短く延びていた。燃焼部は、半円形で底面の掘り込みはみられなかった。燃焼部から煙道部へは小さな段をもって移行していた。煙道部は、長さ0.95mと細長く、煙り出し部に向かって緩やかに傾斜していた。

遺構の切り合い関係は、第203・204・205・206号住居跡より新しかった。

遺物は、カマド内から須恵器の坏(5)・蓋(14)が出土し、住居跡の北壁の中央から土師器の坏(3)、

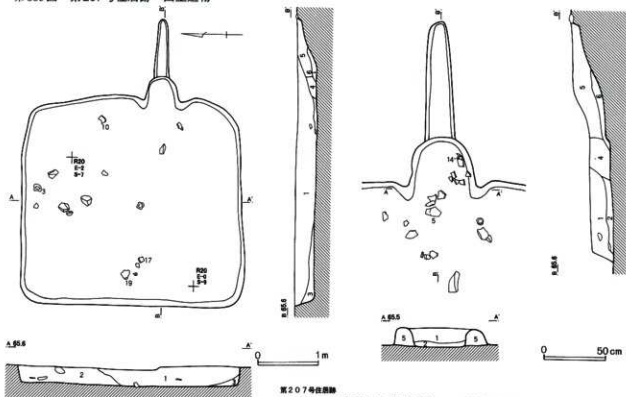
西壁の中央から土師器の甕(17)、須恵器の大甕(19)が出土した。

1から3は、土師器の坏である。1は坏AⅡ、3は坏AⅣである。1・2は底部が欠損している。

4から6は、碗である。4は須恵器(S)、他は須恵器(HS)である。7は、高台付皿である。13・14は、須恵器(NS)の蓋である。4は口縁部、7は高台、14は天井部が欠損している。13は紐のみである。

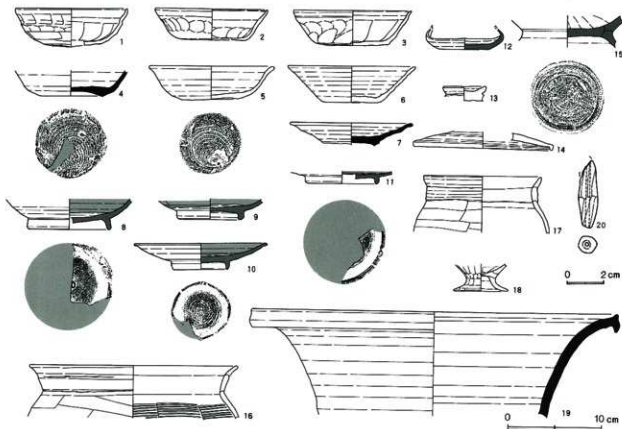
8・9は、灰釉陶器の高台付碗である。10・11は、灰釉陶器の高台付皿である。12は、灰釉陶器の耳皿である。8は口縁部、12は耳が欠損している。9・11は底部のみである。

第359図 第207号住居跡・出土遺物



第207号住居跡

- 1 暗褐色土 焼土を多量に含む、炭を少量含む
 2 黒褐色土 焼土を少量含む、炭を少量含む
 3 褐色土 焼土を少量含む
 4 黒色土 炭化物主体 焼土、暗褐色土を少量含む
 5 暗褐色土 焼土を少量含む、炭化物を少量含む
 6 暗黄褐色土 焼土ブロックを多量に含む



第304表 第207号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	胴	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
1	坏	A II	H	11.8	4.0	6.0	B, D, E, H	普通		黄 褐	30	
2	坏	A	H	11.9	3.2	6.8	B, E, H	普通		暗 茶 褐	30	
3	坏	A IV	H	12.4	3.7	7.5	B, E, G, H	普通		暗 櫻	70	
4	碗	S				6.6	B	良好	R	灰	10	
5	碗	H S	13.1	3.5	6.0	6.0	B, E, G, I	良好	R	にぶい黄橙	40	カマド
6	碗	H S	13.4	3.8	6.0	6.0	B, E, G	良好	R	にぶい黄橙	30	カマド。フク土
7	高台付皿	S	12.7				B	良好	R	灰	60	
8	高台付碗	K			8.5		B, D	良好		灰 白	20	
9	高台付碗	K			6.3		D	良好	R	灰 白	100	
10	高台付皿	K	13.7	2.8	5.6		B, D	良好	R	灰 白		底-90。他-20
11	高台付皿	K			7.5		B, D	良好	R	灰 白	10	
12	耳	皿			5.2		D	良好		灰 白	30	
13	蓋	N S	4.2				B, E	良好	R	灰 白	50	
14	蓋	N S	14.7				B, G	良好	R	灰 白	5	カマド
15	長頸壺	K					B, D	良好		灰 白	80	
16	甕 B III c	H	21.9				C, E, H	普通		浅 黄 橙	20	カマド
17	台付甕	H	12.3				B, G, E	普通		浅 黄 橙	30	
18	台付甕	H	5.5				B, E	良好		橙	20	
19	大甕	S	38.8				B, G	良好		青 灰	10	

第305表 第207号住居跡出土土鐘観察表

番号	色調	残存率	長さ	径	穴径	重さ(g)	型式	欠損分類	写真番号	出土位置その他
20	にぶい橙	80		1.0	0.2	2.3	C 2	I b	459	

15は、灰釉陶器の長頸壺である。底部のみである。

20は、土鐘である。

16から18は、土師器の甕である。16・17は胴部中位以下が欠損している。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第207号竈穴式住居跡を中堀Ⅵ期に位置付けたい。

19は、須恵器の大甕である。口縁部のみである。

第306表 第208号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	胴	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
1	坏	A VI	H	11.7	3.9	5.4	B, C, E	不良		橙	90	カマド
2	坏	A VI	H	11.6	3.6	6.6	B, E, G	不良		こげ 茶	80	
3	高台付碗	N S	14.3	5.1	5.3		B, I	普通		灰 白	50	
4	高台付碗	H S	16.1				B, C, E, I	良好	R	灰 黄	60	カマド
5	甕 B III c	H	20.6				B, C, H	良好		橙	25	
6	台付甕	H	11.9				B, C, E, H	良好		にぶい橙	20	

第307表 第208号住居跡出土土鐘観察表

番号	色調	残存率	長さ	径	穴径	重さ(g)	型式	欠損分類	写真番号	出土位置その他
7	橙	90		1.1	0.2	2.6	C 2	I b	460	

第208号住居跡（第360図）

ほぼ同規模の第208号住居跡と並ぶように、S-18グリッドから確認された。周辺は、土壌・小穴などの遺構が比較的密集していた。

住居跡の形状は、長方形であった。規模は、長辺2.96m・短辺2.13m・深さ0.20mと小形であった。住居跡の北西隅に三基の小穴を検出した。径0.3m～0.5m、深さ0.06m～0.15mと住居跡の規模に比べ、大形の小穴であった。

主軸方位は、N-100°-Eであった。

カマドは、東壁のやや南寄りに検出した。袖は、地山を掘り残して造り、住居跡内に短く延びていた。燃

焼部は、奥に向かって緩やかに傾斜していたが、掘り込みはみられなかった。然焼部から煙道部へは、緩やかに立ち上がって移行していた。

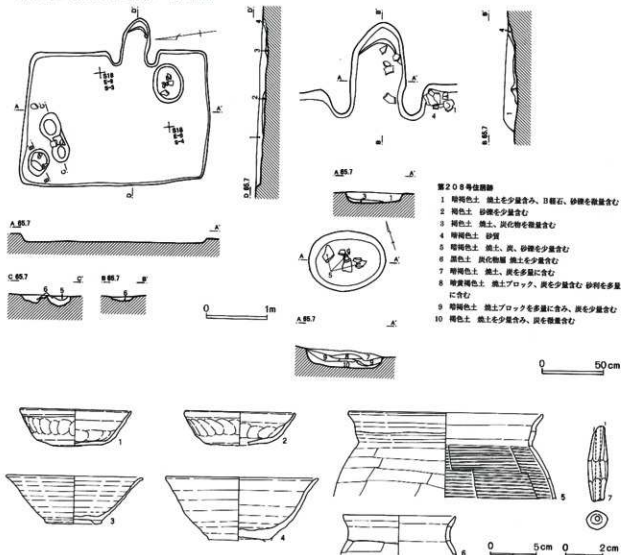
貯蔵穴は、カマドの右脇に検出した。形状は、楕円形で規模は、長径0.61m・短径0.48m・深さ0.13mであった。覆土の上面に多量の炭化物が出土した。

遺構の切り合い関係は、第518号土壌より新しかった。

遺物は、カマド右脇から土師器の坏（1）、須恵器の高台付椀（4）が出土し、貯蔵穴内から土師器の甕（5）が出土した。

1・2は、土師器の坏AⅥである。2は底部が欠損

第360図 第208号住居跡・出土遺物



第208号住居跡

- 1 暗褐色土 焼土を少量含む、D礫石、砂礫を微量含む
- 2 褐色土 砂礫を少量含む
- 3 褐色土 焼土、炭化物を微量含む
- 4 暗褐色土 砂質
- 5 暗褐色土 焼土、炭、砂礫を少量含む
- 6 褐色土 炭化物類 焼土を少量含む
- 7 暗褐色土 焼土、炭を多量に含む
- 8 暗黄褐色土 焼土ブロック、炭を少量含む 砂礫を多量に含む
- 9 暗褐色土 焼土ブロックを多量に含む、炭を少量含む
- 10 褐色土 焼土を少量含む、炭を微量含む

している。

3・4は、高台付碗である。3は須恵器(NS)、4は須恵器(NS)である。4は高台が欠損している。

5・6は、土師器の甕である。5は胴部中位以下、6は胴部上位以下が欠損している。

7は、土錘である。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第208号整

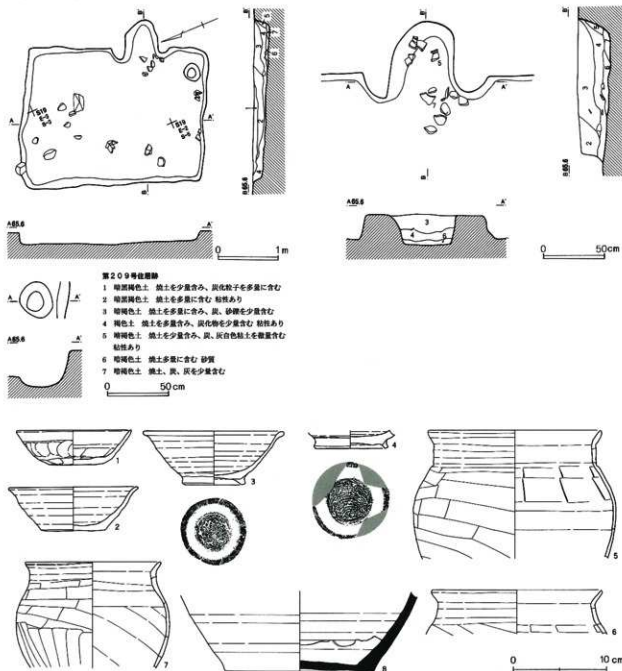
穴式住居跡を中堀V期に位置付けたい。

第209号住居跡(第361図)

ほぼ同規模の第208号住居跡と並ぶように、S-19グリッドで確認された。周辺は、土塊・小穴などの遺構が比較的密集していた。

住居跡の形状は、長方形であった。規模は、長辺

第361図 第209号住居跡・出土遺物



2.40m・短辺2.15m・深さ0.27mと小形であった。

主軸方位は、N-10°-Eであった。

カマドは、東壁の南寄りに検出した。袖は、地山を掘り残して造り、非常に短く住居跡内に延びていた。燃焼部の底面に小さな凹凸がみられたが、掘り込みはみられなかった。

貯蔵穴は、カマドの右側に検出した。形状は、円形で規模は、径0.26m・深さ0.08mであった。

遺構の切り合いは、みられなかった。

遺物は、カマド内から土師器の甕(5・7)が出土した。

1は、土師器の坏AⅢである。

2は、須恵器(HS)の椀である。3・4は、須恵器(NS)の高台付椀である。4は底部のみである。

5から7は、土師器の甕である。8は、須恵器(S)の壺である。5・7は胴部下位以下、6は胴部上位以下が欠損している。8は底部のみである。

以上、出土遺物から第209号竪穴式住居跡を中堀V期に位置付けたい。

第210号住居跡(第362図)

S-19・20グリッドで確認した。周辺の遺構は、比較的疎らであった。

住居跡の上部は削平されていたため、床面に近い部分のみを検出した。

住居跡の形状は、北東隅がやや張る不整形であった。規模は、長辺3.43m・短辺2.97m・深さ0.06mであった。東壁と西壁の一部には、幅0.2mの壁溝を検出した。また住居跡の北半分の床面に五基の小穴を検出した。規模は、径0.1m~0.18m、深さ0.06m~0.12mであった。

主軸方位は、N-115°-Eであった。

カマドは、東壁の南東寄りに検出した。残存状況が悪く、不明な点が多かった。袖は、検出できなかった。焚き口部から煙道部にかけては、楕円形の浅い掘り込みがみられた。

貯蔵穴は、カマド右脇に検出した。形状は、楕円形で規模は、長径0.38m・深さ0.08mと小形であった。

遺構の切り合いは、みられなかった。

第308表 第209号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	径	底径	胎土	焼成	輪轆	色調	残存	出土位置その他
1	坏	AⅢ	H	120	3.7	5.8	B, D, E	良好		橙	70	砂
2	椀	HS		133	4.7	6.6	B, I	普通	R	灰白	30	
3	高台付椀	NS		146	5.7	6.0	B, D, I	良好	R	灰白	95	
4	高台付椀	NS				7.1	B	良好	R	灰白	20	
5	甕	BⅡb	H	183			B, E	良好		浅黄橙		口-90、他-70
6	甕	BⅡa	H	180			B, E	良好		黄橙	15	
7	甕	BⅡa	H	143			B, C, D, E	良好		外-にふい黄橙、内-黄橙	40	カマド
8	壺	底部	S			15.8	B, G	良好		青灰	90	

第309表 第210号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	径	底径	胎土	焼成	輪轆	色調	残存	出土位置その他
1	椀	S				7.5	B	良好	R	灰白	20	
2	椀	NS				8.0	B	良好	R	灰白	10	
3	高台付椀	K	166				B, D, G	良好	R	黄灰	10	
4	高台付椀	K	150				D	良好			30	
5	甕	B	H	199			D, E	良好		浅黄橙	20	
6	台付甕	Ⅱ	H	139			B, C, E	良好		浅黄橙	20	
7	台付甕	Ⅱ				7.8	B, E, H	良好		浅黄橙	40	カマド
8	台付甕	Ⅱ				11.4	B, D, E	良好		暗灰褐	100	

遺物は、カマド内から土師器の台付甕（7）が出土し、貯蔵穴内から土師器の甕（6）、土師器の台付甕（8）が出土した。

1は須恵器（S）、2は須恵器（NS）のそれぞれ碗である。3は、須恵器（S）の高台付碗である。1・2は底部のみである。3は底部が欠損している。

4は、灰釉陶器の高台付碗である。底部が欠損している。

以上、出土遺物から第210号竪穴式住居跡を中堀V期に位置付けたい。

第211号住居跡（第363図）

T-19・20グリッドで確認した。周辺の遺構は疎らであったが、砂利層が確認面だったため、確認作業は困難であった。

住居跡の上部は、削平され、床面に近い部分のみを検出した。

住居跡の形状は、長方形であった。規模は、長さ3.63m・短辺2.58m・深さ0.08mであった。

主軸方位は、N-92°-Eであった。

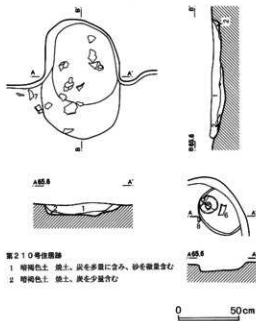
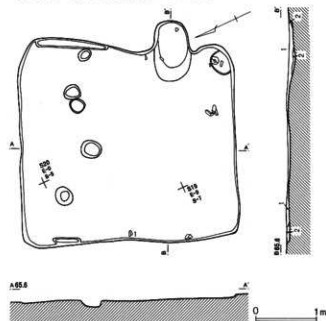
カマドは、東壁の南東寄りに検出した。袖は、検出できなかったが、燃焼部の位置から、住居跡内に短く延びていたと判断した。燃焼部の底面は、円形に掘り込まれていた。

遺構の切り合いは、みられなかった。

遺物は、カマド前面から土師器の甕（4）が、住居跡の中央やや南寄りに灰釉陶器の高台付碗（3）が出土した。

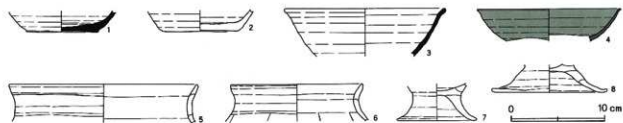
1は、須恵器（HS）の高台付碗である。2は、須恵器（NS）の高台付碗である。

第362図 第210号住居跡・出土遺物

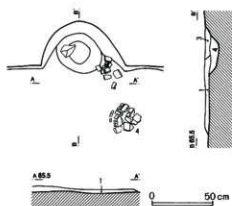
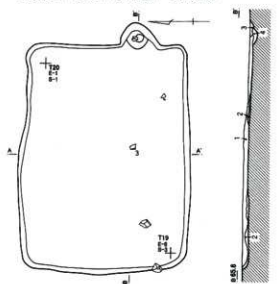


第210号住居跡

- 1 須恵器土 灰土、炭を少量に含む、砂を微量含む
- 2 須恵器土 灰土、炭を少量含む



第363図 第211号住居跡・出土遺物



第211号住居跡

- 1 緑褐色土・灰土、炭化物、砂礫を少量含む
- 2 緑黄褐色土・灰土、炭化物を微量含む、砂を多量に含む
- 3 緑褐色土・灰土、灰を多量に含む
- 4 緑褐色土・灰土ブロック、灰、灰を少量含む、砂礫を微量含む



- 3は、灰粘陶器の高台付碗である。底部のみである。
 4は、土器器の甕である。胴部中位以下が欠損している。
 5は、須恵器(S)の長頸壺である。底部のみである。

以上、出土遺物から第211号竪穴式住居跡を中堀Ⅵ期に位置付けたい。

第212号住居跡 (第364図)

T・U-20グリッドで確認した。周辺の遺構は、疎らであるが、砂利層が確認面であったため、確認作業は困難であった。

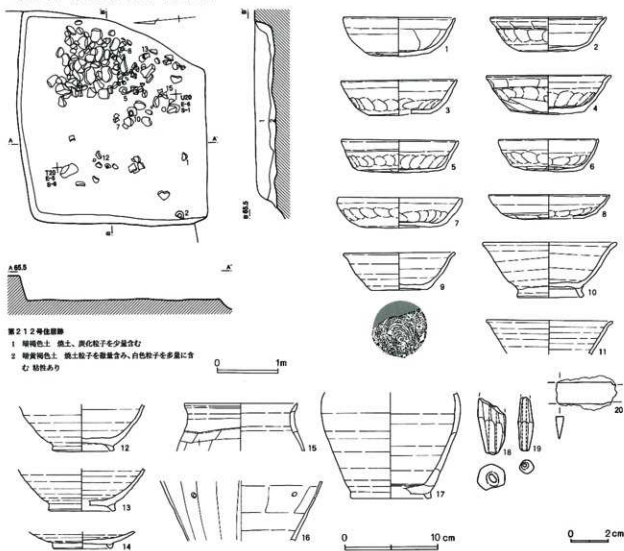
住居跡の東側と南側は調査区外のため、住居跡の形状など不明な点が多かった。残存した北壁の長さは3.30m、西壁は2.81m、深さ0.32mであった。

主軸方位は、N-93°-Eと推定した。

第310表 第211号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	脚	底径	胎土	焼成	軸	色調	残存	出土位置その他
1	高台付碗	HS	128	5.2		5.2	B, E, I	良好	R	褐灰	80	
2	高台付碗	NS	132				B, E, I	普通	R	黄灰	75	
3	高台付碗	K				5.9	D	良好		外-灰白。 内-オリブ灰	100	
4	甕 A III b	H	196				B, D, E, K	良好		灰黄橙	20	
5	長頸壺	S				12.3	B	良好		青灰	15	カマド

第364図 第212号住居跡・出土遺物



第212号住居跡

- 1 暗褐色土、炭化粒子も少量含む
2 暗黄褐色土、炭化粒子を数個含む、白色粒子を多量に含む、粘粒あり

第311表 第212号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	胴	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他	
1	坏	A	IV	H	11.8	4.2	6.3	B, C, E	不	良	淡橙	70	砂
2	坏	A	VI	H	12.2	3.6	5.9	B, D, E	普通	暗黄褐	80		
3	坏	A	IV	H	12.2	3.7	6.7	B, E, H	普通	黄褐	30		
4	坏	A	IV	H	13.1	4.1	7.7	B, D, E	普通	淡橙	50		
5	坏	A	IV	H	12.3	3.5	8.5	B, D, E	普通	暗黄橙	100		
6	坏	A	IV	H	10.4	3.3	5.3	B, D, E	普通	暗黄褐	30		
7	皿		H	13.1	3.2	8.3	B, E	普通	黄褐	60			
8	皿		H	12.7	2.6	7.5	B, D, E	普通	淡黄橙	20			
9	碗		NS	12.7	4.0	6.0	B, E	普通	R	灰白	40		
10	高台付碗	NS	NS	13.4	5.9	6.6	B, E, I	良好	R	灰黄	90		
11	高台付碗	NS	NS	13.2			B	良好	R	黄灰	10		
12	高台付碗	NS	NS			5.8	B, E	良好	R	灰白	50		
13	高台付碗	NS	NS			6.8	B, E, G	良好	R	灰白	30		
14	高台付皿	NS	NS			6.0	B, I	良好	R	灰白	50		
15	台付甕	H		11.9			B, E, H	良好		にぶい橙	20		
16	甕胴部	H					B, E, H	良好		橙	15		
17	長頸壺	HS				8.0	A, B	普通		にぶい橙		底-30、他-15	

第312表 第212号住居跡出土土器観察表

番号	色調	残存率	長さ	径	穴径	重さ(g)	型式	欠損分類	写真番号	出土位置その他
18	にぶい橙	30		1.4	0.5	4.9	C 1	Ⅲ a	184	
19	浅黄橙	90		0.8	0.2	1.1	C 2	Ⅱ b	461	

カマドは、検出できず、東壁に造られたと推定した。

遺構の切り合いは、みられなかった。

住居跡の東側を中心として、大形の川原石がまるとまって出土した。この川原石とともに土師器の坏(5・7)・皿(8)、須恵器の高台付碗(10・13)、土師器の甕(15)などが出土した。

1は、土師器の坏AVIである。2から6は、土師器の坏ANである。7・8は、土師器の皿である。3・8は底部が欠損している。

9は、須恵器(NS)の碗である。

10から13は、須恵器(NS)の高台付碗である。14は、須恵器(NS)の高台付皿である。11は底部、12から14は口縁部が欠損している。

15・16は、土師器の甕である。17は、須恵器(HS)の長頸壺である。15は胴部中位以下、17は胴部上位以上が欠損している。16は胴部下位のみである。

18・19は、土鏝である。

20は、鉄製品の刀子である。

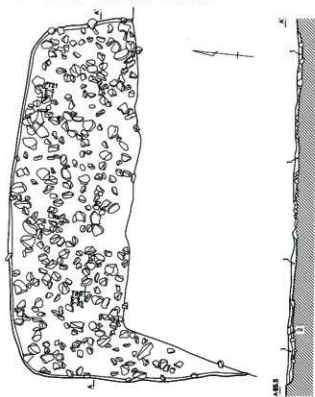
以上、出土遺物から第212号竪穴式住居跡を中塚V期に位置付けたい。

第213号住居跡 (第365図)

T-20・21グリッドで確認した。周辺の遺構は疎らであったが、砂利層が確認面であったため、確認作業は困難であった。また覆土や床面に大形の川原石が、多量に混入していたため、覆土の除去に手間取った。

住居跡の南半分が砂利取りで破壊されていたため、住居跡の形状など不明な点が多かった。残存した北壁の長さは5.67m・深さ0.07mであった。

第365図 第213号住居跡・出土遺物



第213号住居跡

- 1 暗褐色土、焼土、炭を少量含む、砂を少量含む
2 褐色土、焼土、炭を少量含む、砂を少量含む



主軸方位は、N-85°-Eと推定した。

遺構の切り合いは、みられなかった。

1から3は、土師器の坏ANである。2・3は底部が欠損している。

第313表 第213号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	鈎	底径	胎土	焼成	釉	色調	残存	出土位置その他
1	坏	A IV	H	120	3.5	7.5	B, D, E	普通		淡橙	80	
2	坏	A IV	H	11.8	3.1	7.5	B, E	普通		淡橙	30	
3	坏	A IV	H	11.9	3.3	8.2	B, E, G	普通		黄褐	20	
4	甕	A IV b	H	20.0			B, C, E	良好		橙	20	

4は、土師器の甕である。胴部中位以下が欠損している。

以上、出土遺物から第213号竪穴式住居跡を中堀V期に位置付けたい。

第214号住居跡 (第366図)

N-21・22グリッドで確認した。周辺は、区画溝・掘立柱建物跡・小穴などの遺構がみられたが、比較的疎らであった。遺構確認の作業中に遺物が、まとまって出土したため、周辺を精査したところ、住居跡として確認した。

住居跡の形状は、不正長方形であった。規模は、長辺4.0m・短辺2.92m・深さ0.20mであった。

主軸方位は、N-4°-Eであった。

カマドは、検出できず、当初から造られなかったと判断した。

遺構の切り合いは、みられなかった。

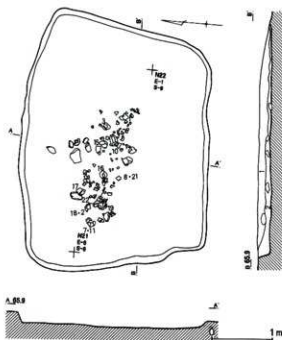
遺物は、住居跡の中央やや西寄りから土師器の坏(2)・皿(8・10)、須恵器の坏(11)・高台付碗(15・16・17)・高台付皿(18)、灰釉陶器の高台付皿(19)、土師器の甕(21)、須恵器の鉢(22)などがまとまって出土した。

1から3は、土師器の坏AVである。4・5は、土師器の坏AVである。6は、土師器の暗文土器である。7から10は、土師器の皿である。5・6・9・10は底部が欠損している。

第314表 第214号住居跡出土遺物観察表

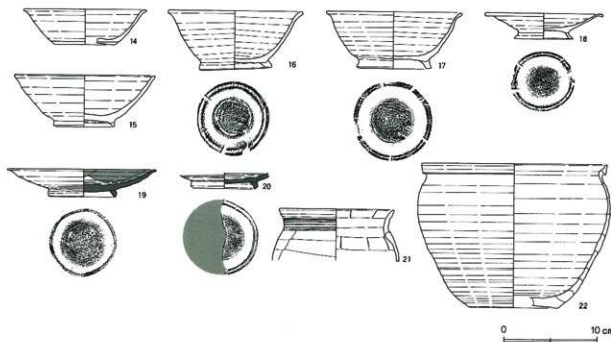
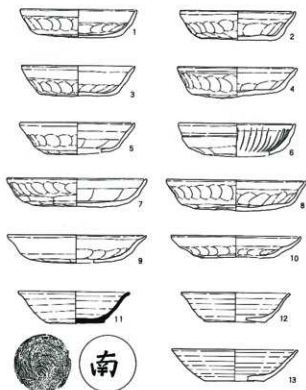
番号	器種	種別	口径	器高	鈎	底径	胎土	焼成	釉	色調	残存	出土位置その他
1	坏	A IV	H	123	3.0	8.5	B, D, E	普通		黄橙	70	
2	坏	A IV	H	122	3.1	7.9	B, E, H	普通		黄橙	90	
3	坏	A IV	H	120	3.2	7.5	B, E, H	普通		淡橙	100	
4	坏	A V	H	126	3.1	8.9	E, H	普通		黄褐	80	
5	坏	A V	H	121	3.3	7.0	B, E	良好		淡黄	20	
6	坏(暗文)	H	122				B, E, H	普通		黄褐	40	
7	皿	H	148	3.0		9.1	B, E, H	普通		黄褐	40	
8	皿	H	148	3.2		9.0	B, E	普通		黄褐	40	
9	皿	H	19.7	3.0		7.3	B, E, H	普通		黄褐	30	
10	皿	H	13.8	2.2		7.7	B, D, E	普通		黄褐	20	
11	碗	S	11.7	3.4		6.2	B	良好	R	灰	80	
12	碗	NS	11.3	3.1		6.6	B	良好	R	褐灰	灰	30
13	碗	NS	13.2	3.4		6.3	B, E	良好	R	灰白	30	
14	碗	NS	12.7	3.7		6.5	B, E	良好	R	灰白	20	
15	高台付碗	HS	14.3	5.5		6.1	B, E, I	良好	R	にぶい黄橙 褐灰(外部)	40	
16	高台付碗	NS	13.9	6.2		7.3	B, I	良好	R	黄灰	80	
17	高台付碗	NS	14.2	6.0		7.2	B	良好	R	灰黄	75	
18	高台付皿	NS	12.2	2.7		6.0	B, E	良好	R	灰白	70	
19	高台付皿	K	15.5	2.9		6.8	B	良好	R	灰白	95	
20	高台付皿	K				6.5	B, D	良好	R	灰白	10	
21	台付甕	H	12.0				B, H	良好		にぶい橙	25	
22	鉢	NS	19.5	15.2		9.2	D	良好		灰白		底-20。口径-5

第366図 第214号住居跡・出土遺物



第214号住居跡

- 1 黒褐色土、磁土、炭化物、目録石を少量含む、漆、土器片を多量に含む
- 2 黒灰褐色土、磁土、炭化物を微量含む、漆を多量に含む



11から14は、碗である。11は須恵器（S）、ほかは須恵器（NS）である。15から17は、高台付碗である。15が、須恵器（HS）の他は、須恵器（NS）である。18は、須恵器（NS）の高台付皿である。12から14は

底部が欠損している。

19・20は、灰釉陶器の高台付皿である。20は底部のみである。

21は、土師器の甕である。胴部中位以下が欠損して

いる。

22は、須恵器（NS）の鉢である。底部が次損している。

以上、出土遺物から第214号竪穴式住居跡を中堀V期に位置付けたい。

第215号住居跡（第367図）

O-21グリッドで確認した。周辺は、区画溝・掘立柱建物跡・小穴などの遺構がみられたが、比較的疎らであった。

住居跡の形状は、南西隅のやや張る不正長方形であった。規模は、長辺3.92m・短辺3.04m・深さ0.15mであった。南西隅は、第28号区画溝が破壊していた。

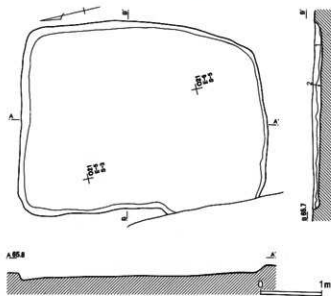
主軸方位はN-14°-Eであった。

カマドは、検出できず、当初から造られなかったと判断した。

遺構の切り合い関係は、第28号区画溝より古かった。

1は、須恵器（HS）の高台付椀である。底部が次

第367図 第215号住居跡・出土遺物



第215号住居跡

- 1 暗褐色土 砂、砂利を多量に含む
- 2 暗灰褐色土 砂利主体



損している。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第215号竪穴式住居跡を中堀V期に位置付けたい。

第216号住居跡（第368図）

O-22・23グリッドで確認した。周辺の遺構は疎らであったが、砂利層が確認面であったため、確認作業は困難を極めた。

住居跡の形状は、方形であった。規模は、長辺2.78m・短辺2.69m・深さ0.20mであった。東寄りの南壁際に長径0.41m・深さ0.17mの楕円形の小穴を検出した。

主軸方位は、N-99°-Eであった。

カマドは、東壁の南寄りに検出した。袖は、検出できず、当初から造られなかったと判断した。焚き口部の前面から燃焼部にかけては、極く浅く窪んでいた。

遺構の切り合いは、みられなかった。

遺物は、カマド前面から須恵器の高台付椀（1）が、住居跡の南西隅から須恵器の高台付椀（2）が出土した。

1は、須恵器（S）の高台付椀である。2は、須恵器（HS）の高台付椀である。

3は、須恵器（HS）の高台付皿である。

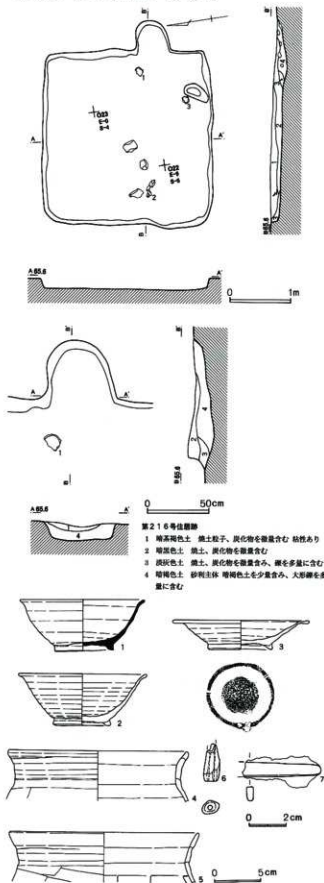
4・5は、土師器の甕である。胴部上位以下が次損している。

6は、土錘である。

7は、鉄製品の刀子基部である。

以上、出土遺物から第216号竪穴式住居跡を中堀V期に位置付けたい。

第368図 第216号住居跡・出土遺物



第217号住居跡 (第369図・第370図・第371図・第372図・第373図・第374図・第375図・第376図・第377図)

P-22・23グリッドで確認した。周辺の遺構は、疎らで、覆土上面に堆積した火山灰とともに確認したため、作業は比較的容易であった。

住居跡の形状は、長方形であった。規模は、長辺8.25m・短辺5.90m・深さ0.65mと、非常に大形の住居跡であった。住居跡の南東部が、カマドと貯蔵穴を囲むようにやや低くなっていた。

主軸方位は、N-93°-Eであった。

カマドは、東壁の南寄りに検出した。袖は、地山を掘り残して造り、短く住居跡内に延びていた。燃焼部の位置から、袖は、もう少し長かったと推定した。焚き口部から燃焼部にかけては、不整形でやや深い掘り込みを検出し、多量の焼土が出土した。また燃焼部奥には、径0.5mの浅い掘り込みがあった。支脚の抜き取り痕跡と判断した。燃焼部から煙道部へは大きな段をもって移行していた。煙道部の先端は、第652号土壇で破壊されていたが、残存部でも、長さ1.5mと細長かった。底面は、煙り出し部に向かって緩やかに傾斜していた。

貯蔵穴は、カマド右側の南壁やや東寄りに検出した。貯蔵穴の西側は第1号土壇と重複していた。形状は、瓢箪形で規模は、長径1.83m・深さ0.36mであった。

第1号土壇は、長径1.4m・短径1.04m・深さ0.24mであった。

遺構の切り合い関係は、第645・652号土壇より古かった。

非常に多量の遺物が出土した。なかでも床直の遺物が多かった。カマド内から土師器の坏 (19・24・37)、須恵器の高台付皿 (57・58)、土師器の甕 (80・86)、須恵器の壺 (90)・甕

第315表 第215号住居跡出土遺物観察表

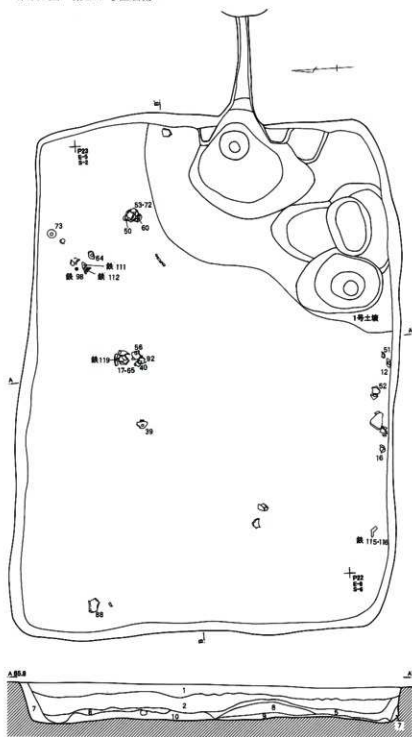
番号	器種	種別	口径	器高	径	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
1	高台付碗	H S	133				B, E, I	普通	R	にぶい 橙	60	

第316表 第216号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	径	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
1	高台付碗	S	130	5.4		6.2	B	良好	R	褐 灰	80	カマド
2	高台付碗	H S	133	5.5		5.6	B, E, I	普通	L	浅 黄	50	
3	高台付皿	H S	142	3.1		6.3	B, E, G	普通	R	灰 黄	80	
4	麦BⅢc	H	190				B, E	良好		内一橙。外一 褐	20	
5	麦BⅢc	H	200				B, D, E	良好		橙	15	

第317表 第217号住居跡出土遺物観察表(1)

番号	器種	種別	口径	器高	径	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
1	坏AⅣ	H	129	3.3		7.9	B, D, E, H	普通		暗 黄 褐	40	
2	坏AⅣ	H	122	3.5		8.5	B, D, E, H	普通		淡 橙	80	
3	坏AⅣ	H	120	3.4		8.5	B, D, E	普通		黄 橙	100	
4	坏AⅣ	H	127	3.2		7.0	B, D, E	普通		黄 褐	40	
5	坏AⅡ	H	122	3.5		7.8	B, E, H	普通		黄 褐	40	炭化物層上
6	坏AⅣ	H	127	3.6		7.3	E, H	普通		淡 黄 褐	50	
7	坏AⅣ	H	120	3.2		8.8	B, D, E	普通		黄 橙	50	
8	坏AⅣ	H	116	3.4		8.5	B, D, E	普通		橙	80	
9	坏AⅣ	H	118	3.3		7.7	B, E	普通		黄 褐	30	貯穴
10	坏AⅣ	H	117	3.4		8.3	B, E, H	普通		明 茶 褐	70	カマド
11	坏AⅣ	H	119	3.5		8.0	B, D, E	普通		淡 黄 褐	90	
12	坏AⅣ	H	118	3.5		6.5	B, D, E, H	普通		暗 橙	100	
13	坏AⅣ	H	116	3.5		7.5	B, D, E, H	良好		黒 褐	30	炭上
14	坏AⅣ	H	120	3.0		8.5	B, D, E	普通		黄 褐	100	
15	坏AⅣ	H	118	3.3		8.5	B, D, E	普通		黄 褐	90	カマド
16	坏AⅣ	H	118	3.3		8.3	B, D, E, H	良好		黄 橙	60	
17	坏AⅣ	H	118	3.1		9.0	B, E, H	普通		淡 黄 褐	60	
18	坏AⅣ	H	121	3.1		8.8	B, D, E, H	普通		黄 褐	100	
19	坏AⅣ	H	121	3.6		7.5	B, D, E	普通		黄 灰	90	カマド
20	坏AⅣ	H	118	3.0		7.5	D, E	普通		黄 橙	30	
21	坏AⅤ	H	120	3.5		6.3	B, D, E	普通		黄 橙	40	
22	坏AⅣ	H	116	3.0		7.4	B, E, H	普通		暗 茶 褐	90	
23	坏AⅣ	H	117	3.4		6.7	B, D, E, H	普通		淡 黄 褐	40	炭化物層下
24	坏AⅣ	H	117	3.5		7.4	B, D, E	普通		黄 褐	100	カマド
25	坏AⅣ	H	118	3.0		6.5	B, D, E	普通		黄 褐	30	
26	坏AⅣ	H	115	3.0		7.5	B, D, E, H	普通		黄 褐	50	
27	坏AⅣ	H	117	3.5		7.0	B, E, H	普通		黄 褐	30	
28	坏AⅣ	H	117	3.3		7.4	B, D, E, H	普通		橙	50	カマド
29	皿	H	146	3.8		10.4	B, H	普通		淡 橙	50	
30	皿	H	159	3.3		10.3	B, D, E	普通		暗 褐	80	炭化物層上
31	皿	H	126	3.4		9.5	B, D, E, H	普通		暗 黄 橙	40	
32	皿	H	154	3.1		10.5	B, E, H	普通		淡 茶 褐	70	ベルト
33	皿	H	147	3.0		9.7	B, D, E	普通		黄 褐	50	
34	皿	H	139	3.0		8.4	B, D, E	普通		黄 橙	30	貯穴
35	皿	H	140	3.1		8.8	D, E, H	普通		淡 橙	20	炭化物層上
36	皿	H	138	3.0		8.6	B, E, H	良好		淡 黄 褐	30	



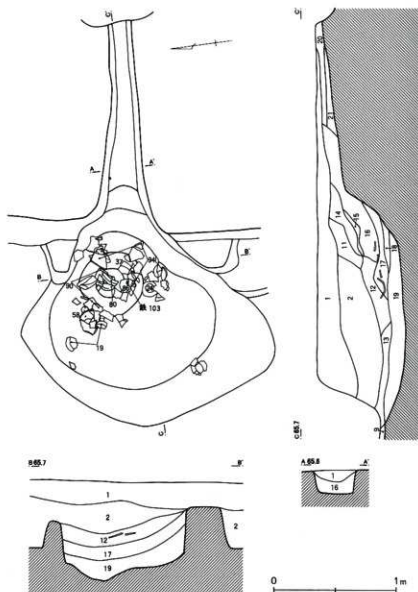
第217号住居跡

- 1 暗赤褐色土 焼土、炭、目録石を少量含む
- 2 暗赤褐色土 焼土、砂を少量含む、暗赤褐色土ブロックを含む
- 3 暗褐色土 焼土を少量含む、炭を多量に含む
- 4 暗赤褐色土 焼土を少量含む、暗赤褐色土ブロックを含む、粘性あり
- 5 黒色土 炭化物を多量に含む
- 6 暗褐色土 炭を多量に含む
- 7 暗赤褐色土 砂と炭化物を多量に含む、粘質土をブロック状に含む
- 8 暗褐色土 焼土を少量含む、炭を少量含む
- 9 暗褐色土 炭化物を多量に含む
- 10 暗赤褐色土 炭を多量に含む
- 11 暗赤褐色土 焼土を少量含む、砂利を多量に含む 粘性あり
- 12 暗赤褐色土 焼土を多量に含む、部分的に硬結している
- 13 黒色土 炭化物を多量に含む
- 14 暗赤褐色土 硬結により赤色化 粘性あり
- 15 暗褐色土 焼土、炭を少量含む 粘性あり
- 16 黒色土 焼土、炭化物を多量に含む
- 17 赤褐色土 焼土と炭 部分的に粘性のある暗赤褐色土を少量含む
- 18 暗赤褐色土 焼土を多量に含む、炭、砂を少量含む
- 19 暗赤褐色土 焼土を多量含む、炭を少量含む 粘性あり
- 20 黒褐色土 炭化物を少量含む 粘性あり
- 21 赤褐色土 焼土粒子を多量に含む
- 22 暗赤褐色土 焼土、砂を多量に含む、炭を少量含む 粘性あり
- 23 黒色土 焼土、炭、砂を多量に含む 炭は部分的に層を成す 粘性あり
- 24 暗褐色土 焼土、砂利を含む、暗赤褐色土を部分含む
- 25 暗赤褐色土 焼土粒子、土層片を少量含む 砂利と粘性のある暗赤褐色土の混合層

(94)、鉄釘(103)が出土した。貯蔵穴内からは、土師器の坏(2・3・4・7・20・21・22・25・26・27・29・33・34)、灰釉陶器の高台付椀(63)、須恵器の壺(89)がまとめて出土した。また第1号土壌からは、須恵器の大甕(93)を、底面に据えた状態で出土した。

住居跡の北東部からは、須恵器の高台付椀(50・53)・高台付皿(60)、灰釉陶器の高台付椀(64)・皿(72・73)、鉄製紡錘車(111・112)が出土した。また住居跡の中央やや北寄りからは、土師器の坏(17)、須恵器の坏(40)・高台付皿(56)、灰釉陶器の小形壺(92)、

第370図 第217号住居跡カマド



鉄製品 (119) が出土した。住居跡の南壁際からは、土師器の坏 (12・16)、須恵器の高台付碗 (51・52) が出土した。

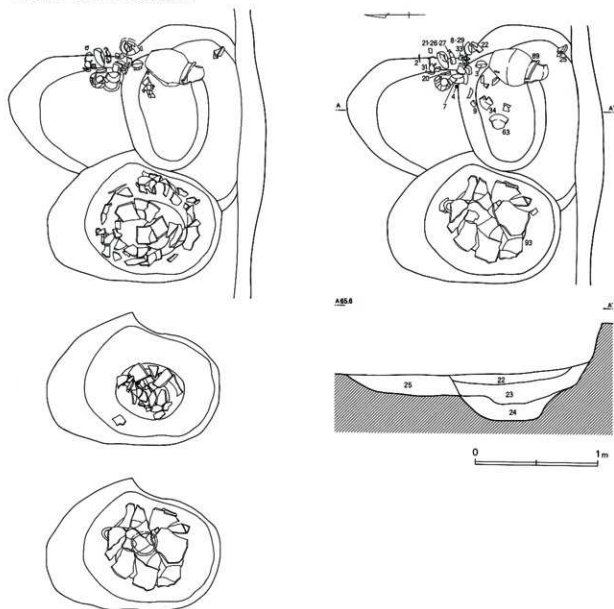
1から38は、土師器の坏である。5は坏AⅡ、21は坏AⅤ、ほかは、坏AⅣである。29から37は、土師器の皿である。38は、暗文土器である。27・29・33・35から38は底部が欠損している。24は黒色の付着物が内面底部から底部にかけて確認できる。漆の痕跡と考えられる。

39から41は、碗である。41は須恵器 (NS)、他は須恵器 (HS) である。40の底部外面には、墨書「仁」がみられる。42から54は、高台付碗である。42から49は、須恵器 (NS) である。他は、須恵器 (HS) である。55は、須恵器 (S) の皿である。56から60は、高台付皿である。59は須恵器 (NS)、他は、須恵器 (HS) である。60は墨

第318表 第217号住居跡出土遺物観察表 (2)

番号	器種	種別	口径	器高	脚	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
37	皿	H	13.7	3.5		9.7	B, D, E	普通		淡黄褐	30	カマド
38	坏 (暗文)	H	13.9				B, E, H	普通		淡黄褐	20	炭化物層上
39	碗	HS	12.6	3.3		6.6	B, E, F, H	普通	R	褐灰		底-100、他-50、P-23
40	碗	HS	12.8	3.3		6.5	B, E, H	普通	R	褐灰	60	
41	碗	NS	14.9	4.2		7.3	B, H	普通	R	灰白	25	
42	高台付碗	NS	13.7	4.0		6.4	B, C	普通	R	灰白		底-100、他-40、P-23
43	高台付碗	NS	13.8	4.3		6.6	B, C	普通	R	灰白	60	ベルト内、炭土
44	高台付碗	NS	13.8	4.9		5.8	B, C, H	普通	R	灰白	40	炭下
45	高台付碗	NS	13.8	5.0		5.6	B, C, H	普通	不明			炭下
46	高台付碗	NS	14.1	5.1		6.1	B, C	普通	R	灰白		底-100、他-20、壁
47	高台付碗	NS	14.2	5.3		6.7	B, E	普通	R	灰白		底-100、他-20、壁

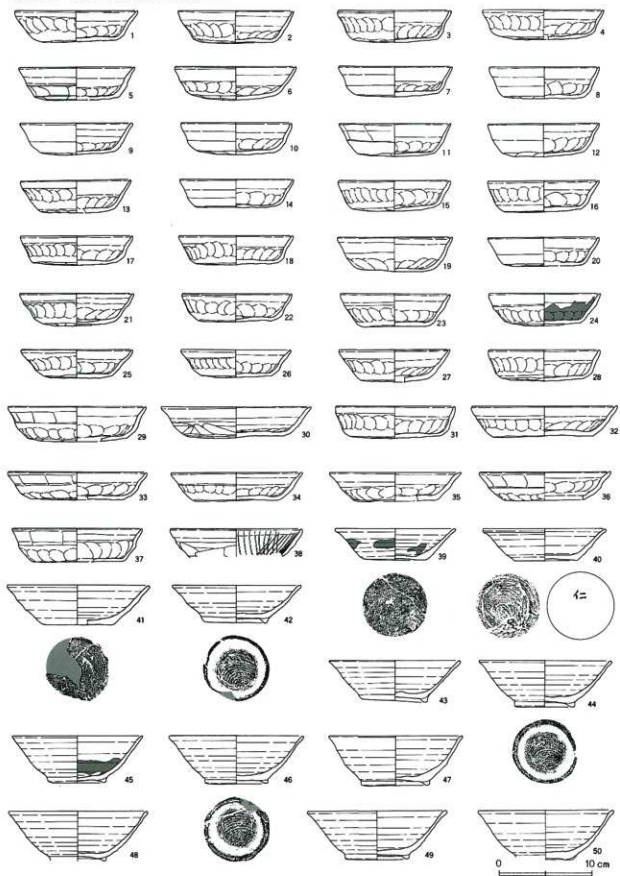
第371図 第217号住居跡貯蔵穴



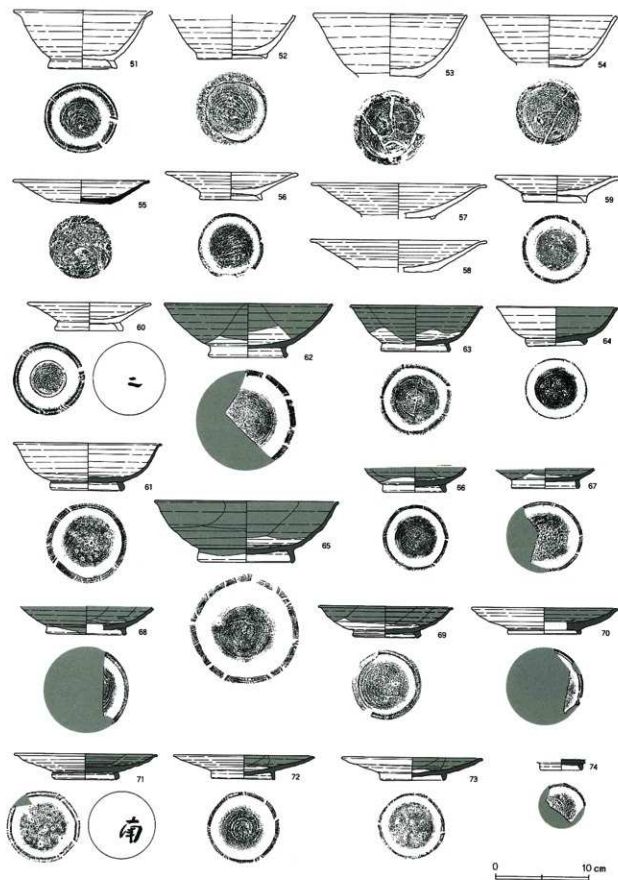
第319表 第217号住居跡出土遺物観察表(3)

番号	器種	種別	口径	器高	胴	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
48	高台付碗	NS	146				B, E, H	良好	不明曜	灰白	25	炭下
49	高台付碗	NS	146	5.1		6.3	B, H	普通	R	灰白	30	
50	高台付碗	HS	143				B, E	普通	R	褐灰	40	
51	高台付碗	HS	145	6.2		7.1	B, F, H	普通	R	橙		底-100。他-25。カマド
52	高台付碗	HS	143			7.1	B, F	普通	R	褐灰	40	
53	高台付碗	HS	162				B, F, H	普通	R	褐灰	80	
54	高台付碗	HS	143				B, E, F, G, K	普通	不明曜	橙	90	
55	皿	S	144	24		6.3	B, F, G	良好	R	灰	40	底-100。他-30, P-23
56	高台付皿	HS	136	29		6.3	B, E, H	良好	R	灰		
57	高台付皿	HS	182				B, C	良好	R	黄橙	40	
58	高台付皿	HS	185				B, C	良好	R	橙	30	カマド

第372図 第217号住居跡出土物(1)



第373图 第217号住居跡出土遺物(2)



第374图 第217号住居跡出土遺物(3)

